"ミュンヘン"への道

日本協会では、このほど世界選手権へ派遣するために必要な費用を基金として、広くハンドボール関係者から募金することになり、その実質的な活動が開始された。

田村会長は従来から、このような構想をもたれ評議員会でも、この趣旨の発言をされていたと記憶している。その時は検討事項ということで具体的な施策にはならなかったが、今回ようやく、それが実り、具体的な事業として、とりあげられたことは誠に喜ばしい。

協会発足以来三十有余年、常に日本ハンドボール界につきまとっていた懸案の問題にまず一歩足を踏みだしたことになる。

これまで、世界選手権に選手団を派遣するにしても、個人負担をせねばならず、種々の問題を残していた。

とりあげなければ、とりあげなければと云われながらも、なかなか実行に移されなかった財源確保の手はじめとして、この問題がとりあげられ、しかも従来とはちがった姿勢でとりくまれていることに、意義があろう。

いままでこの種の問題の解決法は将来を見通したビジョンのないままいきあたりばったりにその場、その場で都合良く解決されてきたため、懸案の問題の抜本的解決にならず、問題は問題として、そのまま、次回にもちこされ、次回は次回で処理するという方法がとられてきた。

ハンドボール界のかかえているいくつかの大きな問題の一つである財源問題がこれですべて解決するという訳にはいかないが、少なくとも、非常に大きな課題であった外国へ選手団を派遣する際の費用の問題は、この募金が円滑にスタートすることによって解決されよう。

会長・副会長が主体的に先頭になって、この問題にとりくむ姿勢を示されていることは誠に心強い。

あとは、ハンドボール関係者がいかにこの趣旨を理解し、自らもそれぞれのもち場で参加していくかにかかっていよう。

協力といった消極的な姿勢でなく、自らもこの運動を成功させ、我々の代表を送るための資金にするのだとの意志をしつかりとそれぞれがもって、この懸案事項の解決をなしとげようではないか。

（藤本）

時評

本誌が読者のみなさんのお手許に届くころには大きな期待をになって、ヨーロッパ遠征の旅に全日本チームが出発していよう。

過去日本は、男子3回、女子2回の選手団を世界選手権に送り出している。それぞれの選手団は持っている力を発揮、多くの土産物をもって帰国し、それが定着して現在の日本のハンドボールのレベルに到達したことには誰も異論があるまい。

しかし、世界選手権の前にチームを作り、選手権の前に渡欧し、各地を転戦し、大会に臨むのがこれまでの通例であった。

これでは、慣れない土地での雰囲気に必しも充分に順化しないうち、本大会に出場することになり存分に日頃の力を発揮できないうらみがあった。

昨年来、半年間渡欧し、最近帰国した安藤純光審判部長も、外国での大会のいろいろ不利な条件をあげ、少しでも場所慣れすることがいかに重要であるかを強調している。

これはこれまでの選手団が多かれ、少なかれ感じていたことであろう。

異国に出るというだけで、我々四方を海に囲まれた国の人間にとっては、大変なことである。ヨーロッパ諸国のように陸続きで、始終往き来があり、国が違うとはいえ膚の色、生活習慣などが良く似ており、言葉も違うと云えば違うが、共通の基盤をもった言語を使用している国々の場合とは大きく事情を異にしている。

今回のヨーロッパ遠征は約二ケ月という長期に亘り、このようなヨーロッパの習慣に順応するというだけでも大きな意味があろう。

そして世界のハンドボール界の超一流国であるルーマニアのコーチを受ける。これはまた大変大きな意味をもっている。

コーチを受けるということは単にそれだけでなく、何故ルーマニアが世界のトップレベルに達し、それを維持しているかを知る上にも重要なことになろう。

彼我の国状の差はあっても、今後の日本のハンドボール界の進むべき、とるべき方向の道しるべになることは確かである。

それにタスマジャン杯。強豪が集るこの大会で充分にもまれ足りない点をよく見つけだし、残された期間に補なわなければならない。いつてらつしやい全日本。より多くのおみやげをもって元気に帰国を!!

（F）

「ハンドボール」5月号（第64号）目次

表紙写真　光島磯雄氏撮影
西日本学生選手権決勝
関大―同大戦（4月10日）
アサヒペンタックス 135mm／3.5
4／250 トライX

ハンドボール界の総力を あげて成功させよう

世界選手権基金（仮称）案が具体化

去る4月19日、臨時常務理事会で開催され、世界選手権に選手を派遣することを目的とした〝日本ハンドボール協会世界選手権基金〟（仮称）を設けることに意見の一致を見た。

詳細は種々の点でなお検討されることになっているが、このような施策が具体的に実行に移される運びになったことは喜ばしいことである。

実施方法などについては次回の常務理事会で話し合われる。

この基金の目的は日本を代表するハンドボールチームを世界に広く活躍できるように、資金を調達することにある。

周知のとおり、ハンドボールが盛んに行なわれているのはヨーロッパ諸国であり、日本が辺地にあることは確かである。そこで各種の大会はすべてヨーロッパを中心に運営されており、開催地もヨーロッパに限られている。

このことは単になかなか交流ができないだけでなく、大会のある度に遠路を旅しなければならないし、そのために多くの日数と莫大な費用を必要とするのである。

一度の遠征に一千萬円近い費用がかかるのであるから、大変なものである。

従来は派遣される選手にかなりの額の個人負担を依頼せねばならず、そのため、技術が優秀であったとしても、大会に参加できなかった例もあった。

このようなことをなくすように従来から、協会独自の財源を確保することが必要だ、必要だと叫ばれながら、いっこうに実行に移されなかった。

田村会長は昨年の第4回7人制ハンドボール選手権の団長になられた時からこのような構想をもったようだし、評議員会でもしばしばこのような形の基金を作るべきだと話されていた。

従来のような行きあたりばったりの金集めでなく、しっかりとした目標と目的のある募金事業だけにその成果が大いに期待される。

本誌先号に第5回世界選手権全日本代表選手であった東嘉伸氏が述べられているようにこの基金を制定し、それを成功裡に運ぶことは、何よりも急務であろう。

毎年広く各階層から、我々の代表なんだと心をこめて集められる基金、ハンドボール界に関係しているものが、十円でも、二十円でももちよって、それを選手団の強化にあてる。このような形がとられれば正に、自分も世界選手権の代表を送り出したのだという気持が、ハンドボールをやっている者一人一人の中に生れてくるであろう。

こういった一人一人の募金、その他このような事業に深い理解に示される方々にお願いして、年間二百萬円を作りたいというのが今回の募金の骨子になっている。

この毎年二百萬円が三年で六百萬円。これを三年に一度それぞれ行なわれる男女7人制の世界選手権大会へ全日本チームを派遣する費用にあてる。

これが今回の基金事業の骨になる。募金方法については、なお細かな検討を必要としているが、これが一日も早く軌道にのり、選手団はとにかく、全国から応援を受け好成績を収めることだけを念頭に専心できる体制がとれるようになることが望まれる。

他競技に比べ、歴史も浅く、現状では、大きく入場料収入も望めぬ斯界で、現在とれる最上の方法であろう。

会長・副会長が先頭にたち、各地にその趣旨を徹底するべく、動かれることになっているので、かなりの成果があがることが期待されるが、要は、ハンドボール界の全員、特に各地でその任に当ることになるであろう人達がいかに、このことを理解し、自らも参画していくかが、懸案の問題を解決する大きな鍵になろう。それとともに、もう一度、現在ハンドボール界が当面しているチャンスの意義に全員が思いを果せ、それぞれかの各目のもち場で努力していこうではないか。

なお、実施にあたっての具体案は5月8日の定例常務理事会（東京）で審議され、そのあと全国評議員会、同理事会に上程される予定だ。

〝みんなの代表〟意識高揚も

この問題について田村会長は提案者として次のような趣意説明を行っている。

『世界への雄飛をめざす斯界のかかえる最大課題は財源である。

財源の安定、確立があってこそ競技力向上、普及の完遂が成される。特に海外遠征に際して選ばれた人たちが、苦労して個人負担額を集めたり、選考にあたって技術的条件よりも経済的条件がともすれば優先されたりするような現状を一日でも早く正常な状態に戻すため、単位は小額であっても全国的な募金運動を展開しその一助にしたいと考える。この運動によって「みんなの代表」という意識も高めることができよう。

なお、実施に際しては「特別会計」とし、海外遠征以外にこの基金を用うることはないようにしたい。』

専門委員の人選おわる

"小数精鋭"の線打ち出す

新常務理事による第1回(月例)常務理事会は4月3日、東京渋谷の体協四一〇会議室で田村会長以下3副会長、8常務理事それにオブザーバーとして村田強対委員長(全日本男子監督)が出席して開かれた。

合議制という新システムを成功させる一つのカギともいわれている6パートの専門委員(任期2年)のリストアップが行われ各担当常務理事(部長)から別表のように推せんがあり承認された(注・審判部のうち、審判審査委員と審判部長会議のスタッフは4月19日の緊急常務理事会で推せんされたもの)。

各専門部とも"小数精鋭主義"を打ち出しており4、5月中に第1回の委員会を開いて今後の活動を話しあう予定である。なお、パートによっては今後は若干の補充を行う予定。

強化対策委員会については、さきに委員長として村田弘氏(全日本男子監督)を選任したが、委員は昨年10月に発表された強対部員をそのまま当てることになり、全日本男子が欧州遠征から帰国後、異動を行う模様である。

国際担当、宮崎氏に
河内氏の辞退で

国際担当常務理事はさきの全国理事会で河内鋭雄氏に内定していたが、同氏が勤務多忙のため辞任を申しでたため宮崎慎六氏が担当することになった。

× × ×

注目の専門委員が各部長(担当常務理事)から推せんされた。

機構の簡素化という田村会長の姿勢にもとずいて、各部とも苦心のあとがみられる人選だ。6部門あわせた延人数40名というのは前年の3局9部13委員会およそ90名に達したスタッフの2分の1にすぎない(数字は強体委を除くもの)。間口を広げすぎて散漫な活動となるよりも、焦点を決めて進むほうが実績が高められるという会長の考えが理解されたようだ。

各部門それぞれに課題があるわけだが、技術委は普及面もうけもつことになっているようだし、懸案の全国大会整備問題も当然ここで原案がねられることになるだろう。審判委は前年期(42・43年度)もっとも充実した動きをみせたと高い評価を得ており、そのスタッフのほとんどが留任した。

「複審制」の実施を機に、審判思想の統一という多年のテーマを是非この任期中につくりあげてもらいたいものだ。

国際委、財務委は日本協会の国際化、拡大化でますます責任が重くなってくるわけだが、ベストメンバーを揃えており手腕が期待される。

総務委はこれまでどおり登録、庶務を主な任務としているが、事業、広報をこの傘下に加えるべきではなかろうか。

いずれにせよ、常務理事会を中心とした合議スタッフの構想をいかに実現のレールへ乗せるかは専門委員の活動力、実働力にかけられているわけであり、各部長がメンバーをしっかり掌握して、スタッフと表裏一体の行動を積極的に展開するよう声を大にして望みたい。

日本協会専門委員

◎印部長(常務理事)

▼強化対策委員会
委員長　村田　弘
▽男子指導委員会　稲石三二、勝繁夫
中沢重夫、若崎重富、高橋健夫
竹野奉昭、北川勇喜、高橋英次
▽女子指導委員会　近藤金博、鈴木義男
池田鉄哉、井薫、宮原俊隆、
▽医事委員会　広田公一(他は人選中)

▼総務委員会
◎岡村昭二、高田比呂美(庶務)、山田哲(同)、中野偉夫(登録)、須藤力(同)

▼国際委員会
◎宮崎慎六、藤本強、久田暁

▼財務委員会
◎森岡数雄、浅川幸男、光嶋浩、腰塚秀代(事務局)

▼技術委員会
◎若崎重富、高橋健夫、宇津野年一、渡辺慶寿、北川勇喜、細井操、中沢重夫

▼審判委員会
◎安藤純光
▽審判審査委員会
藤田八郎、藤田信義、山田計、稲石三二
嶋田新太郎、入江暢一、箱崎敬吉
▽審判部長会議
松田徳之助(北海道)箱崎敬吉(東北)
清水正(関東)山田仁止(東海)嶋田新大郎(北信越)山田進(近畿)辻一義(中国)
越智武(四国)中西敬一(九州)宮城勇(沖縄)
▽競技規則研究委員会
佐野和夫、岡前義春、藤原侑、
北川勇喜、中沢重夫、藤本強
大塚文雄

▼機関誌編集委員会
◎藤本強、杉山茂

“世界雄飛” かけて合宿遠征

ミュンヘン・オリンピックに通じる来春の第7回世界男子7人制選手権に備えて日本協会では選手強化対策委が中心となって全日本男子ナショナルチームの強化につとめているが、本誌既報のとおり、第二次候補選手17名が5月16日から約一ケ月半にわたってルーマニアへ遠征、同地で強化合宿を行うことになった。

合宿後、6月27日からベオグラード（ユーゴ）で開かれる第9回タスマジャン・カップ争奪国際トーナメントに初出場、さらに西ドイツまたはフランスを転戦して7月上旬帰国の予定だが、史上初めての大規模な頂点強化対策にかけられる期待は誠に大きなものがある。

遠征メンバーの健康と成功を祈りながら各選手を紹介しよう。

全日本男子を紹介

選手名のあとの記載事項は出身県、年令、出身校（中学―高校―大学―現所属）球歴（年数）、身長、体重の順。

各選手の執筆項目は
①欧州遠征メンバーに選ばれて
②ルーマニアで何を学ぶか

監督　村田　弘

大阪府出身、44才、日体大出。日本協会選手強化対策委員長。大阪イーグルス監督。第6回男子世界選手権監督
大阪府立三国丘高教諭

コーチ　勝　繁夫

大阪府出身、39才、立教大出。日本協会選手強化対策委員。立教大監督。第6回男子世界選手権及び第1回世界学生選手権コーチ
立教大助教授

※三氏の抱負は別掲

FP（兼コーチ）　竹野奉昭

熊本県出身、32才。藤園中―済々黌高―日体大―大崎電気（球歴15年）。1m74、75K

GK　福本　弘

北海道出身、30才。函館中央中―函館工―芝浦工大―大崎電気（球歴13年半）。1m73、66K。

①全国から選抜された選手数十名。しかもこの度は長身の選手が多数参加しその中で私は平均より数センチも低くまして年令的にも参加選手の中では一二番の年長者であり、合宿練習（一次）には若い選手について行くことが出来るものかと一抹の不安を抱きながら何んら故障もなく合宿練習を終ることになった。これからのルーマニア遠征で海外は四回目となりますが遠征のたびに問題となりますのは男ばかりしかも左右どちらを見ても知らない人々で気がいら立って来てちょっとした事でも気にさわることがありチームワークの点が一番心配です。この点はどのスポーツ団体にもあり私はこのチームワークを数回の遠征の経験を生かし、立派なナショナルルチームを結成し、良き成果を上げるよう努力するつもりです。

②すべてを吸収し体得したい。外国の小柄な選手のプレーをじっくり研究して来ようと思う。それらの選手と日本選手の相異点を見出し、そこから日本人独得のプレーを考えてみたい。またGKとしても同じことが云える。スピードある外国人のシュートを受け止めるにはどの様な練習を行いあの瞬間的体の動きをいかにして養うのか、デフェンスとGKとの守り方動き方も勉強して来たいと思っている。日本選手はけっして技術的には変らなくただ力（パワー）の点で外国人との差が出て来ている。そのパワーをいかに練習の時に養成しているかなどを勉強してきたい。全国のハンドボール愛好者の皆さん、一生懸命に日本のハンドボールが立派に成長しているかを認識してもらう為に行って来ます。

GK　本田　洋

大阪府出身、21才。三国丘中―堺工高―本田技研KK―日体大3年（球歴7年）、1m78、72K。

①ハンドボールをするものなら誰もが夢みる海外遠征。その一員に選ばれ光栄です。「井の中の蛙大海を知らず」とはよく云われますが、身体全体、肌全体で外国ハンドボールの総てを感じとって来たいものです。日本人として、学生として、人生をハンドボールにかけた人間として恥じない態度で行動します。

日本の代表として行くからにはそれなりの覚悟があります。遠征から帰って来て「彼を欧州に行かせてよかった」と云われる姿になって帰って来ます。

②現在の欧州のハンドボールが日本のハンドボールと違っている点がどこにあるのか、なぜ違っているのかを学んで来たい。それには

一、選手の質と心構えの問題について、どうであるか。質とは体力技能、精神的な働き、態度であるか。

二、環境の問題について、どうであるか。施設、合宿、生活態度はどのようにされているかである。

三、練習の質と時間の問題について、どうであるか。きめのこまかいメンタルな指導方法、内容がどのようにされているかである。

以上、三つの問題を中心にして学んで来たい。そこから欧州のハンドボールの進みゆく先の姿を知り新しいハンドボールとはどのようなものであるかを学びたい。そ

して、それに日本が対抗して勝つには何をどのようにすればよいのかを知りたい。

GK 下里敏彦

熊本県出身、22才。日川中―熊本市商―大崎電気（球歴7年）。1m84、73K.

①今回の遠征に、私が選ばれるなんて夢のようです。ハンドボールマンにとって、みんなの目標である全日本の一員に選ばれた事はとても光栄でもあり、又反面責任を感じ何か、こわいかんじです。選ばれた以上、全日本の代表として、胸をはり、練習また、試合にほこりをもって外人コンプレックスをなくし全員一致団結して、一生懸命ガンバッてくる覚悟です。

②はじめて外国に行くので何を学んで来るかまだきめていませんが何んでも、見たりきいたりしてきたいと思う。

日本には、大きいGKが少なくおぼえる事ができなかったが、外人は、自分と同じくらいなので、どんな練習をしているのが見てきたい。具体的には試合に対してのバックスとのコンビネーション、ロングシュートの位置のとりかたサイド・ポストからのシュートに対しての前のでかた、手のかまえかたなどです。

又、自分がいままでやってきた技術でどれだけ通用するか、ぜひためしてきたい。又、どのようにしたら通用するか学んできたい。

GK 井上素行

愛媛県出身、27才。新居浜北中―新居浜工―芝浦工大―大崎電気（球歴12年）。1m70、63K

①体力的に劣る私が長身・大型をめざす全日本に選ばれたことは私自身意外なことなのですが、一員に加えられた以上は、自らの持てる力を存分に発揮するほかはないと決意を新たにしています。

とにかく、「やらねばならぬ」と強く感じている―これが現在の気持ちです。

全国ハンドボール関係者の方々の願いが私達にたくされているのだと云う事を自覚し、責任ある行動とけん虚な気持で終局的な目標に向ってまい進せねばなりません この為には技術の向上はもちろんでありますがチームワークの重大さを忘れてはならないと思います。たまたま年長者の方である私がこの仕事を受け持ちチームのまとまりにおける一つの捨石になればと思いこの方にも力を注ぐつもりでいります。



コーチングスタッフに聞く

村田弘監督 外国チームに対抗できる精神力と体力を徹底的に養って来たい。特に精神的には勝利への執念、体力的にはゲームスタミナ、瞬発力、持久力、パワー巧ち性と五つの点の強化を心がけるつもりだ。

国内合宿では守備力の向上に八割近いウエートをかけて来たがルーマニアでも、長身選手に対する防禦を充分につんで、世界選手権に備える。

このほかチームの組織力として攻撃コンビネーションの確立、攻防の展開力をつけ、特色あるチーム造りという目標にある程度のメドをつけて帰国したいと思う。

タスマジヤン杯は、一ヶ月半のしかも異国における強化合宿後だけに苦しいかもしれぬが、参加国はトップチームばかりでまたとない経験を得られると思っている。また、この機会に外国チームや有力選手のデーターを8㎜などで出来るだけ集めたい。（写真右）

勝 繁夫コーチ 外国選手の"大きさ"になれることが今回のいちばんの収獲になるのではないか。

前回の世界選手権の時は、外国チームの迫力に試合前から圧倒されてしまった。本大会を前にこのような遠征合宿ができるということは実にありがたい。この経験をなんとか活かせるようあらゆる努力をして来たいと思う。

海外遠征の悩みとしてチームワークの問題がある。いくら気心が知れていても、日本をはなれて男ばかりの生活を永くつづけていると僅かなコトから、せつかくの集団にヒビが入ってしまう。充分に気をつけたいと思っている。われわれコーチングスタッフと選手間の調和、ベンチワークなども一つの課題として考えていきたい。

竹野コーチ兼選手 海外遠征はこれで4回目だが、今回はコーチという重責も兼ねており、いちだんと気持ちがはりつめている。

これまでの経験を活かして若い選手たちのまとめ役をはたしたいと考えている。

海外遠征の成否は一にも二にも"人の和"だと思う。

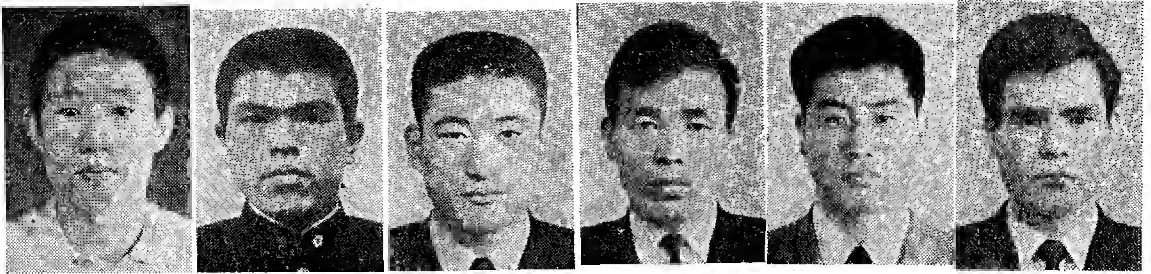
具体的な課題としては、外人コンプレックスをこの期間になんとか取り除けるよう努めたい。

外国のナショナルプレイヤーと二ヶ月近く合同練習すればかなりよい結果が得られるだろう。

これまでの全日本はいわゆる即席編成、ぶつつけ本番で桧舞台に臨んだわけだが今回の遠征は来年への周到な準備であり、この点を全員がわきまえなおして出発したい。（写真左）

5月14日に離日

初の国外強化合宿と国際トーナメントに出場する全日本男子村田弘監督ら一行20人は5月14日午後1時40分羽田発の日航471便で出発することになった。フランクフルト経由ブカレストには15日夕刻到着の予定。



福本　弘　　本田　洋　　下里　敏彦　　井上　素行　　北井　晴次　　近藤　信行

②前々回の世界選手権に出場した時、ルーマニアチームのゲームを見たり、実際に試合をやった時の感じからこれは技術以前の問題で我々貧弱な体では全くどうする事も出来ないと云った半ばあきらめの気持を持ったものでしたがこの様な気持では本当に向上がないと思う。

そこで今回のルーマニア遠征では自分のプレーを全部試して見て通用するものを早くみつけそれを最大限にみがきをかける。この様な方式でないと個人的には体力的にも差があるしどう仕様もないと思う。

学ぶべき事はゲームの運び方、防ぎよの形態、攻撃時のコンビネーションプレー等チーム全体としてのハンドボールを学ぶべきだと思いチームの組織を一段と強力なものになって帰って来たいと思います。

FP　北井晴次

東京都出身、25才。東京松江三中—墨田川高—東京教育大—埼玉教員ク（球歴10年）。1m75、70K。

①今回のメンバーに選ばれたことは、非常にうれしく思うと同時にその責任の重大さを改めて感じています。

ハンドボールも、一九七二年のミュンヘンにおけるオリンピックを期にようやく、脚光を浴びようとしている現在、自分達のこれからやろうとしていることが、そのままあとに続く若者たちの夢とも希望ともなるのだと思うと、ただ単純に喜びなどはわいてこず、一体、いかにして自分の最善を尽くそうか。どのようにしたら責任を全うできるか。寸時のトレーニングも怠っては申し訳ないと思います。

②前回の遠征では、最初の対戦国でもあり、夢中でゲームが終ってしまったが、今度はもっと冷静になって、世界のトップレベルの彼等のプレーを分析したいと思う大きくてスピードの伴った動きからの多彩なシュート、その他の連けいプレー等。たびたび論じられている体格、体力面で日本は絶対に不利であるという事を打ち破る策というものが日本人のテクニックの中には果して全く存在しないのか、滞在が長いだけに見い出せる機会もあると思う。

そして欧州人独持の練習体形も見るべきものとして勉強してきたいと思う。とにかく日本とは全く国情の異った国で行われているハンドボールについて何から何までドン欲に見聞して吸収してきたいと思う。

FP　近藤信行

愛知県出身、24才。鳴海中—桜台高—芝浦工大—大崎電気（球歴12年）。1m70、63K。

①紋切り型な云いかたではありますがやはり光栄であるという言葉より他には見つからない様です

今や、ミュンヘン・オリンピックを目指してハンドボールが増々発展しようとするこの大切な期におきまして、自分がこうして選ばれた事は、喜びと同時に、それに侵ってはいられない誠に重大な役目だということを、ひしひしと感じます。これから自分のなす事が胸を脹らませ、すくすく伸びようとする若者達にどれだけ影響するかと考えると、寸時も忽せには出来ない気持です。

②本場のプレーを実際に味わったのは、第六回の世界選手権だったが、その時は、スピード、又その速さに戸惑うばかりで考える余裕なしにゲームが終ってしまった止まってプレーするプレーヤーがいないこと、ボールを完全に片手で握り自由自在にどんなスキからでもパスを通し、多彩な攻撃のムダのない動き。又、ディフェンスにおける動きも決してオフェンスにひけをとらないすばらしい動きをしていたこと（主にマン・トウーマン的動きが強かった）等の真のハンドボールを身体で味わい、見て来たわけであるが、その時は無我無中でその技術を習得することや分析してみる暇がなかった。

今回の長期間の遠征では前回味わったものを生かして戦法技術や、特に日本チームが弱いと言われるディフェンス等を勉強して来たいと思う。又、常々言われている日本チームの前に立ちはだかる体力の問題。いかにしてこの不利な条件を克服出来るか。ヨーロッパのハンドボールの中で学びながら日本のハンドボールを見い出して来たい。それには我々遠征するものがすべて一つの輪となり、〝前に迫まる巨大なもの〟にぶつかって行かなくてはいけないように思う。

そして、ヨーロッパプレーヤーのもつすさまじいくらいなファイトをすべて持ち帰って来たいと思う。

FP　飯田誠行

京都市出身、23才。松原中—伏見工—同志社大—大崎電気（球歴9年）1m88、75K。

①ハンドボールマンにとって最高の喜こびで大変うれしく思います。ヨーロッパの強豪の胸を借り我々の力がどれくらいのものであるか？またどの様にするべきか？前回の世界選手権の時に立寄りナショナルチームと対戦する機会を持ったがコテン、コテンにやられました。今回の遠征でその差が縮まったか、またあわよくば一泡吹

かせてやろうと楽しみです。それを思うと今から胸が踊ります。自分に与えられた課題を全うし今まで色々とお教えを頂きました諸先輩、先生そして会社の御理解に深く感謝致します。

②ルーマニアーこの伝統あるチームに接して練習、試合出来るのは大変意義ある事と信じております。同国は来春の世界選手権において当然優勝候補に上るでしょう。そのチームの中から得る物を一つでも多く吸収したいと思います。そして昨年来日されたネデフコーチに再会し前回充分マスター出来なかった事を今度こそ全部身につけて帰って来たいものです。ネデフ氏に云われたパワーアップについてはまだまだ不充分で残念ですが技術的、感覚的なものを完全にマスターしたいと思います。そして共産圏の国におけるスポーツマンの底に流れる精神的な何かにふれる折があれば大変な勉強になると信じ、この内的なものと肉体の外的なものとの関係が解ればとたのしみでいっぱいです。それと個々の役分について充分勉強して来たいと思います。

FP　近森克彦

山口県出身、23才。富田中ー徳山高ー芝浦工大ー日新製鋼ー大崎電気（球歴8年）1m81 74K。

①今回、私は選考されるまで非常に苦しい感じでした。学生時代と相違して社会人生活では学生の様に練習も出来なく、またいちぢ広島で勤務したブランクが感ぜられました。

また、若い人が次々に出てこられたこともそうでした。

とにかく選ばれたことは大変に光栄であり、私はチームプレーをする者の一員として、常にチームが勝ち、是非オリンピックに出場できるように心を一つにして助け合いながら、喜びを分ち合えるプレーヤーになりたく一生懸命頑張る覚悟です。

②前回の遠征、又、来日した仏（ステラ）、中共、西独などをふりかえるとにかく欧州人のプレーを知ることと慣れることが必要だと思う。自分としては日本でやっているフォーメーション、個人技術がどの様な形で、どの位通用するか。外国チームの攻撃、守備のスタイルを観察してきたい。とにかく日本人が外国に行き、痛切に感じることは相手が大きく力でくることに驚いてしまうことでありまず第一に、それに慣れることが肝要である。私は欧州でも日本でも基本は変らないと思うので、その点を深く学び自分のこれからの練習、日本での練習に生かしたい。最終的には学ぶというより、見て慣れ相手を知ることが今回のルーマニア・ユーゴ遠征の最大の点であると思われる。自然とその点で学んでゆくことに、又学ぶようになると思います。

FP　木野　実

大阪府出身、23才。旭東中ー寝屋川高ー立教大ーワクナガ薬品（球歴8年）。1m80、75K。

①立大三年の冬第七回世界選手権大会のメンバーとして参加し今回二度目の海外遠征であるが、何しろ前回は、夢にまでみた遠征で何でもみてやろう主義であり、自分の力を試すことにすぎた嫌いもあったと反省する。しかし今回は来年の世界選手権でオリンピックの出場権がかかっている大事な一年であり、四十日間という長期の合宿遠征で充分外人のプレーに接する絶好の機会を持ちえることだし、前哨戦として日本チームの力を打診する意味で意義のある遠征になることは、間違いないことである。選考されたという嬉び以上にその意味に於ても私は、過去の視野の狭い考えを棄て、自分の所属チームのカラから抜けだし、デッカイ気持で、全員が融和の精神で良い点、悪い点を指摘し合って努力は惜しんではならないと決意している。

数多くのハンドボールマンを代表し、全日本チームの一員としての自覚と責任感を前回よりもひしひしと感じる。これを生かすも殺すもコート上での実践にかかっている。

②日本の球技全体をみてもわかる様に今迄は攻撃優先という考えが占める範囲が大き過ぎた様に思われる。守備よりも攻撃する方がどちらかというと面白いのである。その為七人制に切り換えられて、オールラウンドプレーヤーが必要な時に防禦の練習が見落とされていた気がする。外国選手と試合していくらシュートしてもゴールは、ほど遠く巨大な壁の前でポトリ、ポトリで全くシュートするのがイヤになった時があった。打てそうな気がするのに打てない、実に一線防禦での連携プレーが見事なのである。得点をしても、それを守らなければならないことは十分承知しているはずなのに、練習での防禦の練習は、どうしても短くなってしまっていた。防禦連けいの必要性を認識して、ゲームの半分を占める守備について多く学んできたいと同時に、ディフェンスの前から、上下タイミングよく打てるテクニックも学んできたい。又プレー一つとってみてもたたそれを模倣するだけでなく、自分の完全な肉になる様自分に合ったものを創っていかなければなら



近森　克彦　　飯田　誠行　　木野　実　　野田　清　　早川　清孝　　平岡　秀雄



中井　武三　　有永　修二　　藤中　憲二　　東　一敏

ないと考えている。世界権選手前の大事な遠征である。吸収一辺倒だけでなく、自分達で考え、作り、まずそれをぶつけてみる姿勢は崩さない様にしたい。

ＦＰ　東　一敏

熊本県出身、23才。花陵中—熊本市商—立教大—大崎電気（球歴9年）。1m79、67K。

①昨シーズンに選手生命を賭けていた私は、第一次候補に選ばれたあとの1月の合宿には「やれるだけのことはやって、それで結着をつけよう」と心に誓い参加した

幸いにして、第二次候補にとの連絡があった時は、「うれしかった」の一言です。ウキウキした心の中にも、大変な事になったと思う気持とで複雑であった。というのは、世界強豪のルーマニアの事は、多少なりとも、先生や先輩達に聞いていたからである。

自分の身体で、本当に体力的に持つのであろうか。色々の疑問が頭に浮んでくるが、本場欧州で、自分のプレーが通用するか、対等にプレー出来るのか、この遠征により、これまでの選手生活を顧りみて、力一杯やり、又、欧州のプレーを体得してきたい。

②スポーツには、ここまででよいという頂上はないが、現時点におけるルーマニアのプレーはその最高峰に近いものであろう。日本は、その中腹かもしれない。

筋力的、体力的にもおとる私は、ルーマニアの選手のプレーを随時、修得し自分のプレーに作り変えたい。

自分自身、攻撃にも「これ」といったものもないが、守備は、人一倍劣るから、まずは、ディフェンスの強化に努めたい。ステップ・シュートでくる場合は、ある程度、カットすることが出来るが、ジャンプ又は、ステップからジャンプ・シュートに切り変わった時のタイミング、マン・ツー・マンのフットワークの悪さと、GKとのコンビ、以上のごとく、守備が全然なっていないので第一にディエフェンス。

次に、攻撃であるが相手のディエフェンスの体型によって、素早く、攻撃方法が出来ず必要時間に無駄が多い為、どんな守備体型にでも、素早く、自分のシュート・コースまた、アシスト、おとりになるような動きがスムーズに出るように勉強してきたい。

「百聞一見にしかず」の諺どうりルーマニアに限らず、欧州選手の一挙手一投足までに十分、眼をそそぎ、勉強してきます。

ＦＰ　野田　清

愛知県出身、22才。守山西中—愛知工—立教大—大同製鋼（球歴8年）1m69、65K。

①われわれの今回の経験が、オリンピックにつながるかと思うと身が引きしまる。この責任感をプレーへの執念、勝利への執念に転じさせて、一つでも多くの成果を身につけるよう努力したい。

②外国チームに対して自分のプレーが通用するか、さらに日本チームの攻防が役に立つかを見きわめて来たい。通ぜぬものなら徹底的に相手の力を分析し合宿期間中になんとか打開の糸口を見つけ出したいものだ。またルーマニアの練習方法で日本流にアレンジできるものがあれば習得したいとも思う。

ＦＰ　早川清孝

福岡県出身、22才。玄海中—博多工—日体大—ワクナガ薬品（球歴7年）1m79、72K。

①過去7年間は心身を鍛錬するという目的でやって参りましたが今回欧州遠征の一員に加わったことは生涯忘れることの出来ぬ喜びになろうかと思います。

私のような未熟者が諸先輩をさしおき選考されましたことは非常に心苦しく存じますが、選考されました以上は、高校・大学を通じて学んでまいりましたあらゆる技術を存分に発揮して、チームが好成績を上げるように努力致す覚悟でおります。

文末になりましたが今まで御指導して戴きました諸先生、諸先輩に心から御礼申しあげたい気持ちでいっぱいです。

②国内に於きましてはあらゆる試合に出場することができましたしかしながら、海外遠征におきましてはまったく無知であります。日本のハンドボールの水準が国外においてどれだけ通用するものか自分の技術がどのようなものであるかを試すのに絶好の機会だと思っています。

欧州のハンドボールがどのようなものであるか—基礎技術、応用技術それに伴う練習方法及び体力的な面ありとあらゆるものを貪欲に吸収して日本ハンドボール協会の普及に貢献できれば私自身にとって最高の幸福と存じております。

体育大学の出身でありますので欧州の体育活動がどのようなものであるかをこの目で確かめ自分の研究のかてにしたいものと思っています。

日本との友好を深める意味におきましても見聞を広めると共に自分が日本人であることを誇りにもって学んでくるつもりでおります。

ＦＰ　平岡秀雄

京都市出身、22才。深草中—塔南高—東京教大—大崎電気（球歴4年）。1m83、76K。

①私は大学での4年間、トップレベルの関東学生界にあって、トッププレーをめざして練習し、数多くの試合でプレーしてきたつもりでした。しかし、このたびの欧州遠征メンバーに選ばれ、私は何処が人より優れていてこのメンバーに選ばれたのかを考えてみ

たとき私には何も満足できる答えはありませんでした。私の今の状態では世界を目標とする遠征メンバーの一員としてあまりにも貧弱なものではないかと思いました。そこで私はこれまでの合宿、そして遠征のときには自分自身の技術のレベルアップだけでなく、他の人にはない優れた技術を身につけなければと考えています。

②私は今までに各国の優秀なプレーを写真・映画それに本などによってだいたいの所は知ったつもりでした。しかし過去に海外遠征をした先輩方の話しでは、実際に外国に出てそのプレーを見なければこの狭い島国・日本にいたのでは想像できないだろうということでした。

ただ単に直線の百メートルを走るのでさえ海外試合の経験をつまねばならないといいます。ましてハンドボールのように多彩なプレーを行なうにはより以上の経験をつまねばならないのは当然のことだと思います。そんな意味からも今度の遠征では一歩でも世界のトップレベルに近づけるように努力し、私にとって飛躍する石段としなければならないと思います。

FP　藤中憲二

山口県出身、21才。天尾中—岩国工—日体大4年（球歴9年）。1m77、69K。

①栄えある全日本のヨーロッパ遠征メンバーに選ばれて大変うれしく思っています。僕のような未熟なものが選ばれナショナルチームの一選手として練習出来ることが不思議なくらいです、だから、このチャンスを逃がさず、代表選手の良い所を勉強して見習い、練習に練習を重ね、誰が見ても恥ずかしくない選手になりたいと思います。又本学を代表して行くのだから行動、態度に注意して一層精進して行きたい。チームのメンバーに選ばれても十七名の多人数だからレギュラーに入るのが容易なことではない。選手同志、お互に競争になりそうだ、日体大百名の部員の為にもレギュラーになる決心で頑張り期待に添いたい。

この遠征は自分にとって良い勉強となり可能性を確かめる絶好のチャンスでもあるので広範囲にわたっていろいろなことを学びとるつもりです。

②始めての遠征でポイントを何に絞って良いか判りません。あれもやって見たい、これもといった状態です遠征に行き何も得られなかったら申し訳けがないので行く迄にはポイントを捜しておき、かって世界大会に出た人の話しを一つでも多く聞き勉強して行くつもりです。一度西ドイツが来日したとき試合を見てハンドボールそのものが異っているのに驚きました。最近日本人もスケールが大きくなったといわれるが、まだまだ格段の差があった。だから、僕が一番知りたいのは、小さい日本人が世界の長身を相手に戦うのに、どうしたら勝てるかということです。最めて世界のハンドを見るだけでも勉強になる。ヨーロッパにハンドボールが集中しているだけに多方面に良い勉強となると胸をときめかしている。ただ僕の脳裏にあるヨーロッパのハンドボールがどのようなものか現実と一致しないので何を学んで来たいかキャッチしがたい。バクゼンとしているというのが現在の心境である。

FP　有永修二

兵庫県出身、20才。陵甲中—西宮東高—立教大3年（球歴5年）1m86、78K。

①このほど欧州遠征メンバーに選ばれたわけですが、初めは選ばれるなど夢にも思っていなかった事だったので、この事を聞いた時嬉しかったと言うよりもビックリしたと言うのが実際の気持ちです。そしてあらためて、これからが色々な意味で大変だと思いました。

遠征メンバーに選ばれたからにはやはり、この名誉に恥ないように頑張りたいと思います。そして出発までに出来るだけ自分の短所を補い、長所をのびるだけのばしむこうに行っても恥かしくない様にしたいと考え、大いに意欲を燃やしている次第です。

②これまでに外国へ遠征された先輩の方々から外人選手とゲームをした時の様子などについて聞いているわけで、かなりの外人コンプレックスをいだいているのを感じます。まずそれらの事を実際に自分の目で見、そして肌で感じて来たいし、そのコンプレックスをなくしたい。やはり欧州のハンドボールは日本のそれよりも数歩進んでいると言っても言いすぎはないだろう。そこのトレーニング方法を見てくるのは大いに役立つだろう。また日本はバックが弱いと言われているが、どこがどういう様に弱いのか具体的に学んで来たい。またゲーム展開や、攻撃方法、特にステップシュート、パスワークなども勉強して来て、来年2月のフランスで行われる世界選手権に「これならやれる!」という自信をつけて来たいと思います。

FP　中井武三

京都市出身、19才。八条中—伏見工—同志社大3年(球歴8年)。1m79、69K。

①私はこのチームの最年少者であり、他の方々と違って技術面でも精神面でも甘さが多く、経験、知識の浅さもありますが、このたびのチャンスで念願の日本の一流のプレイヤーの方々と一緒にボールを握るができ、国内合宿でも多くの得ることがありました。まして本場ヨーロッパに遠征できるのですからいろいろの技術や知識、それに、精神面においても吸収したいし、学びたい事が多くあります。そして、それを自分のものに確実にしたいと思っている次第です。

②ルーマニアで何を学んできたいかと聞かれても、今の私には、学ぶべきことが多すぎると答えるしかありません。今迄自分は、関西では、ある程度通用すると思っていたが、ナショナルチームに入って自分のプレーが、いかに劣っていたかがわかった。この遠征でまずチームプレーを少しでも身につけ、皆さんに近づきたい。それと私は外国チームとの試合経験がないので、外国人の恐しさも、欠点も、わからないので、ルトマニアで、外国選手に通用するプレーを身につけてきたい。又、共産圏諸国の試合に対する執念というのも学んできたい。

渉外役員に渡辺氏

日本協会では、欧州遠征チームの渉外及び通訳として渡辺俊夫氏（東大学生）を委嘱した。

全日本男子　貫録の圧勝

大阪イーグルスと親善試合

欧州遠征をおよそ一ケ月後に控えた全日本男子ナショナルチームは、チーム結成第1戦として4月22日午後5時から二千近い観衆を集めた大阪府立体育会館で、大阪イーグルスと親善試合を行い大量32点を奪って快勝。貫録を示した。

全日本男子 32 (8－4, 24－2) 6 大阪イーグルス

○……全日本は野田、近藤、近森飯田、木野、有永、GK本田でスタートしたが、立ちあがりはスピードもなく精彩を欠いた。

これは、苦しい条件下でも実力をフルに発揮できるようにという狙いから、この日の午後東京を出発し会場へついたため、ウオームアップに充分な時間がさけなかったことも原因している。宿題として残ろう。

○……相手の乱調をつくことのうまい大阪イーグルスは、ゆっくりしたペースに誘いこんで食い下った。

しかし、後半になると、全日本はようやくプレーにスピードがのり、30秒東がインターセプトから独走したのを口火に一気に得点を重ね、疲れのみえた大阪陣になだれこんで強味をみせた。

○……全日本は練習過程からいっても、高度なチームプレーはまだ望めない。この試合でも、ごく単純な組み合せの連けいプレーしかみられなかったが、いったん波にのるとさすがに史上初というスケールの大きいチームにふさわしい迫力に富んだ攻撃をみせ、足のネンザで序盤出ただけの木野を除く全員が得点を記録した。

○……課題といわれるディフェンス力は、相手がベテラン揃いの力よりも技のチームだけに、はたして外人選手に通用するかどうかこの試合からは判断できない。

1・5ディフェンスの中央部を1m80級が埋めるのは壮観だが外国チームの突進力は想像以上のものがある。ルーマニア合宿での成果を待ちたい。

○……日本協会と強対委ではこのようなナショナルチームの国内転戦を積極的に行うことになり、9月上旬実施に移す予定。

得	【全日本】		【イ倶】	得
0	本田	GK	島崎	0
0	福本	GK	広川	0
0	下里	GK		
5	近森	FP	樫塚	3
0	木野	FP	松尾	2
5	近藤	FP	福井	1
4	有永	FP	東	0
1	飯田	FP	井上	0
1	野田	FP	青木	0
3	早川	FP	北岡	0
3	藤中	FP	田中	0
2	北井	FP	山崎	0
3	中井	FP	奥浜	0
1	東	FP	木村	0
1	井上	FP		
2	平岡	FP		
1	竹野	FP		
32、(2)		7MT	(0)	6

全日本男子強化選手を指名

強化対策委員会では昨年末に発表した全日本男子第一次候補選手40名のうち、第二次候補（欧州遠征メンバー17名）にもれた23名の選手（別掲）を「全日本男子強化選手」とすることに決め指名した。

第二次候補を「全日本A」、強化選手を「全日本B」とし、Bの合宿を6月中にいちど開きたい意向である。

また、A、B合同の強化合宿を9月下旬に予定しており、その結果、選手の入れ替えを試みるが、上半期（4月～8月）の主要大会のデーターをもとに新たにBチームへ選手を加えることも申し合わされている。

なお、1月の第一次合宿に試験や勤務上の都合で参加できなかつた7名の選手は、そのまま強化選手として残されている。

村田強対委員長の話　欧州遠征する全日本（第2次候補）と今回指名した強化選手による合同練習を9月に行い、その結果、第3次候補を選ぶつもりだ。

合同練習までに強化選手の中へ今シーズン成長を示したプレイヤーを補充しておきたい。

来春の世界選手権に出場する代表が最終的に決まるのは12月の全日本選抜大会後になるだろう。

全日本B

（全日本男子強化選手）

GK	綿貫　敏雄	（東京教員ク）
	川口宗一郎	（立大出）
	尾形　譲	（三景）
FP	森　宗春	（芝浦工大）
	新実　俊夫	（〃）
	明石　雄次	（〃）
	森山　清	（中央大出）
	植木　一久	（中央大）
	谷藤　勝美	（日体大）
	斎藤　光男	（〃）
	井上　亮一	（〃）
	福井　稔	（大阪イーグルス）
	江名　英彦	（三景）
	西村　功	（大崎電気）
	加藤　久勝	（住友化学）
	飯端　寿昭	（三国丘ク）
	市原　則之	（全広島）
	北村　文雄	（日本発条）
	大山　高英	（日進商会）
	小野口正二郎	（立教大）
	松浦　栄義	（同大出）
	藤井　良治	（明治大）
	鈴木　幸男	（早大）

守りの強化に懸命
全日本、第2次合宿終わる

全日本男子第二次候補（欧州遠征チーム）の第二回合宿は4月17日から20日までの4日間東京駒沢体育館と大崎電気室内練習場で行われた。

2回目の顔合せ。選手同士もとけあい、それがパス練習などにもはっきり現れるようになった。個々の持つ秀れたテクニックが「チーム」としての力にまとまれば、史上最強といわれるにふさわしい攻守の展開は容易である。

村田監督、勝、竹野両コーチそれに北川、高橋（英）強対委員らの建てたプランも前回の個人練習から〝チーム造り〟へ進められ、第2日（18日）以降は、コンビネーションプレー（3対3）が練習スケジュールに初めて加えられた。

期間を通じてのテーマは「ディフエンス力の強化」におかれ、極端に云えば練習時間の8割が守り、攻めの練習は2割にしかすぎない。

これは、前回（41年2月）の世界選手権で総得点(73)＝2位、総失点（84）＝15位というアンバランスをうんで、外国の関係者から『日本は守りさえ強くなれば、世界のAクラス』と云われた教訓にもとづくものである。

最終日（20日）には、学生界で今シーズン最有力といわれる日体大と練習マッチを交えた。

ハーフマッチ（攻防戦）まで練習過程が進んでいない全日本は、個人技を活かした単調な攻撃しか示せなかったが、チャンスをつかむと、各選手は多彩なシュートを見せて得点、ハードトレーニングによって養われたスタミナにもものを云わせ前半で勝負を決めた。

しかし、ディフエンス面では突進力のある斎藤（1m81、80K。全日本B）などにしばしばシュートチャンスを許しており、外人選手を相手とするにはいっそうの研究が必要だろう。

欧州へ出発までにあと1回（5月4日～8日・東京）合宿を行う。

北海道選出理事に石切山氏

北海道協会はこのほど役員改選を行い石切山稔治氏（日体大出）を理事長に再選した。

また北海道ブロックからの日本協会派遣理事として同理事長の重任も決めた。

国体に関する登録規定

日本協会総務部では前号既報の「昭和44年度日本協会登録要領」のほか、国体における登録規定について次のような連絡を関係者に送った。

一、高校男女は、今年度も選抜・混成チームの出場が認められるが、その場合は、あらかじめ「チーム名称」の名儀登録が必要である。登録料その他納入金は不要。

一、国体に限り、各部門とも人員は11名に特別規制する。

審判部の国内日程決る

○全日本大会審判員研修会
場所　東京
期日　5月23日〜25日

○公認審判員研修会
場所　富岡市（インターハイ）
上尾市（教職員大会）
長崎市（国体）
名古屋市（実業団大会）
期日　詳細未定

カッコ内の大会期間中に実施。

昨年開催され、好評だった全国大会審判員研修会は本年も昨年とほぼ同じ時期に開催されることになった。

審判技術の統一という目標を達成するのには、もつとも期待のかけられる研修会だけにその成果が待たれる。本年は複審判制という新しい制度を推進させていかなければ全く新しくならないだけにより一層ここでのルール解釈、思想統一が必要になってくる。

審判部のより一層の努力が望まれるところであろう。

この他、ブロック単位の講習会が例年通りもたれるし、年1回の審査になってい審判審査委員会は45年1月17日に予定されている。

また審判部合同会議は8月7日と45年1月18日に予定されている。

複審制、国際審判員講習会へ山田計氏を派遣するなど、多くの計画がある審判部の着実な発展を望みたい。

技術部の本年度計画

技術部は本年度は従来の普及部の事業も含め事業を進めていくことになっているため、普及関係、技術関係の施策がもたれている。

普及関係としては、自衛隊への普及が大きな目標とされ、将来自衛隊全国大会の準備と講習会がもたれる予定になっている。

それとともに中学校の指導要領の改正に伴ない、いかに指導普及を進めていくかの研究が、従来の技術部の指導体系作製委員会の仕事と関連をもちながら進められていくことになっている。

技術関係では、中学校の指導書の作成のための研究を行ない、作成中の基礎編に続いて技術・練習編をも作成していく予定。

寂しさを感じるのは、昨年度めざましい活動を行なった技術資料作成委員会の仕事の継続事業がなくなっていることである。地味な仕事だけに、すぐにどうといった大きな成果は得られないであろうが、5年後、10年後の斯界のことを考えるならばたとえ細々としてでも続けていかなければならない仕事であろう。

何らかの形で、めばえはじめた芽をつまずに、地道なデータ集めの仕事を積み重ねていくべきであろう。

全日本総合選手権の要項を一部改正

全立大ら推せんチーム決定

1、競技方法、予選制度は昨年に準じる。

2、◎協会推薦チーム＝昨年度優秀3チーム（全立大、日体大、大崎電気）

◎地区代表チーム、12チーム
関東・東海・近畿　各2
北海道・東北・北信越・中国・四国・九州　各1

◎学連代表　9チーム
◎実連代表　4チーム
◎教職連代表　2チーム
◎開催県代表　2チーム

教職員連盟の設立によって、総合選手権のチームが右のように決った。学連・実連・教職連代表は6月10日迄、地区代表は7月1日迄に協会に連絡することになっている。

女子は参加チームが16チーム以内の場合には、準決勝リーグ、決勝トーナメント方式を採用する。

第1回常務理事会議事録（抜すい）

4月3日

本紙②〜③頁詳報以外の議決事項は次のとおり

一、渡辺JOC委員（副会長）からJOCに対してハンドボール関係から役員の選出を要望したと報告。

一、国体常任委員会にハンドボール関係者を送りこむよう努める

一、選手強化にともなう対策とその予算については西副会長—村田強化委員長のラインによって進める。

一、村田強化委員長（注・オブザーバーとして出席）から、女子のトップレベル強化に対しては実業団各チームのバックアップをたのみたいとの発言。

一、今年度の国体は、登録を11人とし、GKの背番号は原則として1及び12とする。

一、事務局員の社会保険などを考りよする。

一、日韓高校スポーツ大会（8月駒沢）実行委員の日本協会担当者を若崎重富常務理事とする。（高体連側担当者は徳永睦繁氏に決定している）

一、事務局員三人の担務を次のように決めた。
▽財務・登録関係　腰塚秀代
▽強化委（全日本）及び常務理事会関係　原　絹代
▽機関誌・庶務　並木三恵子

◎4月19日臨時常務理事会の議事録は次号に掲載。

訂正　本誌前号で飯田昭新常務理事（立教大出）の名前を明と誤ってお伝えしました。つつしんでお詫びいたします。

7月に全日本自衛隊大会

常務理事陣に若手起用

全日本実連

全日本実業団連盟は、4月6日東京・大崎電気で理事会を開きオーナー中心であった常務理事陣を実働力のある若手に切り替えた。

また、規約改正を行い、組織（第3条）を、これまでの大地域制から各都道府県実連（沖縄をふくむ）単位とし、実連を持たぬ地区は、所属ブロック実連または単独チームをもって組織団体とする。

このほか、第1回全日本自衛隊選手権を7月駒沢で開催することに内定した。

【役員】▽会長　古賀和佐雄（千代田印刷機製造社長）▽副会長　渡辺和美、山岡憲一＝以上留任、数原洋二＝新任▽理事長　田中滋章▽副理事長　平出一▽常務理事　池田鉄哉、江名英彦、岡部正文、緒方逸雄▽理事　富永劭、西村亮治田中登司治、井薫、隅田正彦、竹野奉昭▽監事　古賀健一郎、浜田猪三郎▽日本協会派遣役員　田中平出。

1名欠員の理事には山口県実連理事長が決まりしだい就任。

世界選手権までに10回の合宿

選手強化対策委では欧州遠征から帰国後、来春の世界選手権までの全日本男子強化プランを検討していたが、このほどその日程を次のように内定した。練習地はいずれも東京の予定。

このプランどおりに実施されるとすれば、ルーマニアでの合宿をはさんで国内合宿は1月、3月、4月、5月の4回をふくみ、合わせて10回行われることになる。かってないことだ。

なお、第5次合宿（8月26～29日）は、別面所報のとおり、全日本A（第二次候補選手17名）、同B（強化選手23名）それに新強化選手を加えての合同合宿とし、終了後、第三次候補選手（詳細未定）が発表される予定である。

全日本男子下半期国内合宿予定

▽第5次		8月26日～29日
▽第6次		10月29日～11月1日
▽第7次		11月28日～20日
▽第8次		12月21日～25日
▽第9次	45年	1月21日～25日
▽第10次		2月9日～13日
▽第1次	44年	1月22日～26日
▽第2次		3月22日～25日
▽第3次		4月17日～20日
▽第4次		5月4日～8日

日韓高校、…程決る

韓国の高校チームを日本に迎えて行なわれる日韓高校スポーツ大会の日程が次のように決定した。会場は駒沢屋内体育館。

▽8月18日17時～18時30分
44年度インターハイ東京代表チーム（東京地区優勝チーム）
▽8月19日14時～15時30分
44年度インターハイ優勝チーム

6月に韓国遠征校決定戦

「全日本学連では韓国に遠征する代表チーム決定試合を6月2日駒沢屋内球技場で開くことは決めた参加校は関東、関西、東海の3学連から推せんされた各一校でリーグ戦によって代表を争う。

全日本社会人連盟への構想

……田中　滋章

全日本実業団連盟では去る4月6日の理事会で従来色々な方面から育成を叫ばれていた一般クラブチームについて、未だに日本協会より何の手も打たれていない現状を顧みて、それを包含した全日本社会人連盟にしたらどうかという提案がなされ、本年度はその検討期間とすることになった。この提案の内容としては、この7月に初めて開催する全日本自衛隊選手権と前記一般クラブ、実業団の3本柱でもってこの社会人連盟を運営し、この3者の上位チームでリーグを開いたらどうかという考えである。

しかし、一般クラブチームについては各県でその育成の方法がマチマチであり、選手そのものをすべて実業団、クラブに完全に色分けしてしまうのは今後の実業団或いはクラブチームの成立を妨げる可能性もある。だが、進んだ県では○○高OBというクラブから脱却して地域別に或いはヨーロッパ式のクラブになりつつあり、この場合にはぜひ共クラブチームだけの大会が欲しいと思われる。

従って日本協会で手掛けるべきか、全日本実連ですべきか異論のあるところだと思われるが、ここに問題を提起して各界のご意見を聞きたいと思う。そしてぜひこの機関誌が中心となって意見を集めて載きたいと思います。

手近かなところではまず愛知クラブチーム連盟理事長の太田氏及び非常に進んだ考えで育成されている岐阜県の方などにぜひ具体的な方法その他を発表して載きたい。（全日本実業団連盟理事長）

1969年を展望する

日一日と近づくパリの世界選手権、そしてミュンヘン・オリンピック。国内球界の鼓動も激しく高くひびいているようだ。
　希望のうちに迎えた1969年の国内有力チームを眺めてみよう。

杉山　茂
（NHK運動部）

　来春フランスで開かれる予定の第7回世界男子7人制選手権を頂点として、今年の球界は盛りあがったムードのうちに新しい歴史を刻みこむことになるのだろうが、シーズン開幕を前に見のがすわけにはいかぬ問題がいくつかあるので、それから書いていこう。
　その第一は、日本協会が、全日本男子第二次候補17人の国内公式試合出場を規制したことである。
　思い切った措置という支持もあるが、大方は、その意を理解しにくい表情である。
　学生界がこの決定に猛反対なことはすでに本誌でも伝えられているが、最終候補でもない選手たちを何故〝全日本〟に拘束しておくのか、私もフにおちない。
　例えば、実業団の雄・大崎電気（埼玉）は本来なら

GK　福本
FP　下里　竹野　近藤　近森　井上　飯田　東　平岡
（東は立教大、平岡は東京教大から新加入）

という最強メンバーを布くわけだがいずれも全日本第二次候補のため、国内試合には姿を見せない。
　世界選手権を控えるシーズンに優秀選手を〝現場〟に出さぬ理由はどこにあるのだろう。
　しかも、協会関係者は、全国理事会の決定というだけで、詳しい説明を一切行っていない。再検討の余地は残されていないものなのか。
　第二は、学園紛争により大学のチーム力がはなはだ不安定なことである。
　学事日程の乱れで、練習が思うにまかせず未調整のまま公式シーズンを迎えたところ、新入部員ゼロのところなどが軒なみだし、3月23日の「全関学人総決起集会」では関学・川上貴司選手（高津高出）が左目失明のおそれもある重傷をおうという不幸なできごとを招いている。
　各地リーグ戦はかなり混戦・乱戦の様相を呈しそうだ。
　第三は女子界の名門・愛知紡（愛知）が正式に部を解散させたことである。会社側の理由にもよるが、黄金時代からあまりにも一気に坂をころげおちてしまった。さびしいことだ。実業団チームを存続させていく難しさを教えているといってもよいようである。しかし全日本総合6連勝をはじめ約10年間に14の全国タイトルを掌中にした偉業は永く球史にとどめられるだろう。改めて当時のプレイヤー、関係者の努力に敬意を表したい。

強力な日体、中央大
立教大はカラーを一変

男　子

・・・学生界・・・
　前述のように学園紛争の影響を多くのチームがうけており、その実力を推察するのはなかなか難しい。
　しかし、今年もあいかわらず関東勢が全国最上位を占めることだけはまちがいなかろう。
　なかでも日体大（東京）の呼び声は高い。早川（全日本）高橋らを卒業させたうえGK本田、ポイントゲッター藤中を全日本に抜かれているが、井上、斎藤（ともに全日本B）を中心に谷藤、氷海、笠原大川塩崎、GK大村らでカバー層の厚さをみせている。
　昨年は関東学生春季、全日本学生と好調なスタートを切りながら下半期はやや精彩を欠いたが、今年は各大会とも優勝候補の一番手にあげられる。
　全盛期をつづける立教大（東京）は野田（全日本）、東（同）、GK川口と攻守の要が抜け、かなりスケールが少さくなった。
　しかし小野口、加藤、戸田、倉前、橋本らテクニシャンの勝負強さは、トップチームの実力を充分に備えており、むしろ昨年までとは異ったカラーでどのような試合ぶりを見せるか興味深い。新人では片山（浜松南高）がまず出てこよう。すばらしい成長を示している左腕・有永は全日本のためはずれる。
　中央大（東京）の評判も高い。GK望月、喜田、植木（全日本B）長広ら去年の主力が残り、新、植田・佐藤・中野ら若手も伸び豪快な攻撃を誇る。高校界で出色といわれた花輪（中央大附高）佐々木（明星高）が入学し、攻守の厚味は日体大と互角。花輪は〝ミュンヘンのホープ〟と嘱望されている選手だ。問題は毎年期待されながら肝心のところでのぞかせるもろさだと思う。これさえなくなれば宿願のタイトル獲得は有望である。
　この三校を追うのは早大（東京）、関西大（大阪）、同志社大（京都）、法政大（東京）、東京教大（東京）あたりではなかろうか。
　早大は、GK綿貫（全日本B）ら三人が卒業したが鈴木幸（全日本B）、鈴木博、尾島、斎藤、杉山と攻撃陣の主力が健在だし、GK山本も成長した。
　法政大は荒井、武井、大浜、西村、新人・田上（熊本市商）らで今年もダークホースとしてあばれそうだ。昨年は惜しいところで負傷者が続出し逸機したが、滑り出しさえうまく行けば一波乱を招こう。
　東京教大は長身平岡（全日本）

が学窓を去り、斎藤、浅野、水藤らの巧技を中心とするチームに変わった。好守のGK上野が昨秋の負傷から完全に立ちなおっていれば、チームとしてのバランスがとれているだけに活躍しよう。

関西勢の奮起実るか

打倒関東をめざす関西学生界にあっては、やはり関西大、同志社大が他校を一歩リードしている。シーズンふたあけの西日本学生（本誌31頁参照）でも両校の決勝となっている。

昨秋、不利の予想をくつがえし同志社大の手からは権を奪った関西大は、今年も緒戦の対決を17－14でモノにし幸先よいスタートをみせた。

GK西口、長野、宮永らが去ったものの馬着、許、松田、中辻、西脇、宮松といった攻撃の要が残った。スケールも近年になく大きいし安定している。タイトル奪還をめざす同志社大は松浦（全日本B）とGK和保が卒業、エース中井を全日本にとられるのが痛い。

舟木、町田、中野、光田、阪野らの奮起でなんとかしたいところだろうが苦戦はさけられまい。

両校にとって共通の目標は関西学生の優勝であり、全日本学生で関東勢の一角を崩すことだ。

2年つづけて、全日本学生でベストエイトに残れなかった低調を関西学生界一団となって発奮していると聞くが、イキの抜けぬ関東学生のようなもみあいが見られぬことも不振につながっているとすれば、反省は一校、二校だけのモノではあるまい。課題はやはり〝スピード〟だろう。

関西勢停滞のスキをついて飛躍を狙っているのは中京大（愛知）だ。

昨年の全日本学生ではベストエイト入りを果たしたが、今年はさらに目標をあげている。巧者鈴木をリーダーに吉田、杉本、笹野、GK有川らが主力。

カムバック成るか芝工大

第二集団には芝浦工大、明治大（いずれも東京）、関学（兵庫）大阪体大、大阪経大、桃山学院大（いずれも大阪）甲南大（兵庫）西南学院大（福岡）などがあげられる。学園紛争のあおりをいちばんうけたのは芝浦工大であろう。昨年はシーズンが深まるとともにチーム力が落ち全日本学生2位がわずかに名門らしい成績で春秋のリーグはBクラスに落ちている。

全日本Bに名を連ねている森、新実、明石の若手トリオを軸に高鍬、大江、大矢、金子、木全ら個々の持つ技倆は秀れており、佐藤新監督を中心に心気一転まとまりさえつけば、最上位戦線へのカムバックは容易とみたい。

明治大は部員不足に悩んでいるがGK田中、巧者藤井（全日本B）田辺、野村と攻守にトッププレイヤーを持ち、気力に満ちたシャープなプレーは伝統のものだ。

伝統といえば、かっては関西学連の代名詞的存在であった関学の低迷を聞いて久しい。今年は学園を吹く嵐に大きくゆれ、西日本学生ではその姿さえ見せなかった。

細井、真砂ら小人数でどこまで戦い抜くか、名門の斗志だけが頼りといったのが実情のようである。関西の新進・大阪体大は坂口を切り札に着実なチーム力アップを遂げており、桃山学院大も三国土田、今西といった攻撃力に秀れた選手を擁し、新人・花（桐蔭高）も大型（182センチ）だ。大阪経大はエース桐をはじめ水野、脇田、清水らが健在、試合展開に安定感がもうひとつ欲しい。大阪体大を西日本学生で降した甲南大は二部から一気に一部Aクラスを狙っている。昨秋のリーグを3年以下で乗り切っており、GK和田、吉川、山岡中村らも自信にあふれているようだ

地方勢にあってその力を伸ばしている西南学院大は、安部、津田らで躍進をめざしている。

上位めざす日大ら

このほか有力と目されるのは東北学院大（宮城）、日大、慶応大国士館大、順天堂大、明星大（いずれも東京）、防衛大（神奈川）、富山大（富山）、名古屋大（愛知）、京都大（京都）、岡山大（岡山）、広島大（広島）、山口大（山口）、松山商大（愛媛）、鹿児島大（鹿児島）の各校。

関東2部の首位を争うと予想される日大、慶応大、さらに京都大、名古屋大あたりがトップグループを狙う実力を備えている。

地方勢では、昨秋の九州学生で常勝西南学院大を降した鹿児島大が、その好調をどう今シーズンに発揮するか興味が持たれる。沖縄で琉球大、沖縄大が活動をはじめたのも注目されよう。

苦戦必至の大崎電気

・実業団界・

常勝大崎電気が前述のように主力9人を全日本に送りこんだための苦戦はさけられず国体（一般男子）、全日本実業団での連勝はかなり難しくなる。

トップに躍り出て来そうなのは最近の実績からすれば三景（東京）、住友化学菊本（愛媛）、常盤工業（岐阜）それに充実の日進商会（神奈川）、富士製鉄名古屋（愛知）あたり。

大崎電気は、西村（全日本B）が選手兼監督代行ということになり旗野、片山、太田、谷口、佐藤佐々木らと新人林（兵庫工）、沢田（花巻農）でメンバーを組むがGKにFPの尾崎を廻すという苦心を強いられている。攻撃力はともかく守りの不安はかくせない。

ちなみに大崎はチーム結成以来実業団にはいちどしか負けていない。主力が中共へ遠征した40年5月、都民体育大会で留守軍が千代田印刷機製造（東京）に喫したものである。

さて、優勝圏にあるなかでは三景が江名、尾形（ともに全日本B）を軸に高梨、内藤、榊らが多彩な攻撃と巧みな守備を誇っている。新人も上平（明星高）、山本（中京高）ら力のある4人を加えいちだんと厚味を増した。

住友化学菊本はエース加藤（全日本B）のほか白石、金剛、神代平野、新人伊藤（下松工）らの若い力とベテラン落海、長嶺、GK季原らの巧技がかみあって安定した布陣である。しかしポストプレー中心の攻撃はかなり各チームに覚えられてしまっている。今年は戦法に一工夫を望みたい。

常盤工業は、昨年加入した山田のシャープな動きで、チーム全体がしまって来た。威力のある高橋巧技の中島、鳥村、吉金それにGK渡辺の堅守も相変らずで、丹羽（中京高）ら6人の新人を加えたのもプラスとなろう。

この3チームは『ベストメンバーの大崎を破らなくては……』といいながらも、宿願の全国タイト

ル獲得に燃えており、激戦を展開しそうだ。

日進商会と富士製鉄名古屋がどこまでトップチームに迫るかは今年の焦点の一つといえよう。

着実な補強をつづけている日進商会は米沢、正本、永嶋、北橋、奥村、GK大柴と主戦メンバーが不動のうえ、大山（全日本B）、出口（ともに法政大）、佐藤（塩山商）、三浦（気賀高）と有力選手を新加入させた。大山（182センチ）のロングヒッターぶりは定評があり、永島、北橋とともに豪放な攻撃を完成させれば、一気に最上位進出を果たせよう。

富士製鉄名古屋も充実して来た。黒岩、高橋満と左腕日光による攻撃トリオはA級だ。高校界の有望選手4人を加えたが、そのなかでは安達（大分東高）がよい動きを示している。

全日本実業団選手権が地元で開かれることもあり、ぜひともベスト・フォア入りを遂げたいところである。

精鋭集めたワクナガ薬品

一試合も行わぬ前から話題になっているのは大阪からデビューするワクナガ薬品だ。

〃日本のエース〃木野（全立教・全日本）をはじめ早川（日体大・同）市原（広島商大—大崎電気—全広島・全日本B）、高橋、森（いずれも日体大）、久保、松井（いずれも香椎高）、GK松田（関学）という布陣はいきなり上位へランクされるだろう。しかし今のところスタッフはこの8名だけなため、木野、早川が全日本に出向くとチームが組めない。

木野は『来年から活動ということになってしまうのではないか』と残念そうだ。

同社の湧永常務は7年ほど前、関学のバックスとして活躍した人メンバー不足をみかねて同氏もエントリーするという。

上り坂の第2グループ

トップグループを追うチームは多士済々、しかも意欲的だ。とりわけ千代田印刷機製造（東京）、日本鋼管京浜、セントラル自動車（いずれも神奈川）、大同製鋼（愛知）、本田技研鈴鹿（三重）、宗形製作所（大阪）、住友金属、丸善石油（いずれも和歌山）、川崎車輌、富士レジン（いずれも兵庫）三菱レイヨン大竹、日本鋼管福山（いずれも広島）、武田薬品光、出光石油化学（いずれも山口）らは国体、全日本実業団の両大会でベストエイト以上への食いこみを目標としており、攻守にいちだんの進境を示している。

千代田印刷機製造、本田技研鈴鹿、宗形製作所、三菱レイヨン大竹といったチームは部歴を重ね、それなりの実績もあるわけだが、対照的に今年から来年さらにそのあと大きな飛躍をとげようとするチームの多いのも斯界にとってはたのもしいことだ。

野田（立教大、全日本）、GK柳川（熊本市商）と二人の即戦力を加えた大同製鋼、下茂・向井の広高コンビをはじめ高校界の逸材6人を加えた日新製鋼呉はその代表的なものだ。

また、武田薬品光、出光石油化学ら山口勢のように未経験者を指導しながらチーム造りにつとめ、全国大会での活躍をめざすまでに成長して来たところも目立っている。地道な努力に敬意を表するとともに、その健斗を願ってやまない。

このほか青森マツダ（青森）、光電機（群馬）、日立製作所（茨城）、安田生命（東京）、金沢市役所（石川）、日本発条（神奈川）、日本碍子（愛知）、三菱油化（三重）、京都信用金庫（京都）北陸電力（福井）、大阪ガス（大阪）、東洋ソーダ、三井石油化学（いずれも山口）らの試合ぶりが注目されよう。

拡充をめざす自衛隊球界の動向も興味深い。7月には初の全国大会が予定されている。各隊とも大変な熱の入れようと聞くが、そうした努力が強チームの誕生に実ることも間近いだろう。

自衛隊勝田（茨城）は特に期待される存在であり、海上自衛隊関係からも優秀チームが出て来そうだ。

大阪イーグルスが中心

・教員界・　全日本教職員連盟発足の年でもあり、いちだんの充実が期待される。

昨年、全日本教員で、初優勝した埼玉教員クと国体優勝の大阪イーグルスが今年も他を引きはなす存在。

埼玉は、北井を全日本に送りこんでいる。結城、高田、GK高橋、新加入の川添（順天堂大）らで全日本教職員2連勝を狙う。地元だけに負けられない。

大阪イーグルスは福井（全日本B）、樫塚、松尾、GK島崎ら不動の陣容である。ダークホース視されているのは新しく名のりをあげた東京教員ク。大西、藤原、山口、高野、GK綿貫（早大、全日本B）とスキがない。

このほか、岩手教員、スワロー兵庫、福井教員、福岡教員、長崎教員、熊本教員がトップクラス。

AOKらの闘志に期待

・クラブ界・　斜陽といわれるが、むしろ苦しい条件のなかでよく活動していると賞したい。

昨年は全日本総合に8、国体には17チームが出場している。

実力的には、多くを望むべくもないが、国体でAOK（栃木）、奈良ク、全神奈川がベストエイトに進出した試合ぶりは特筆されてよいだろう。

全神奈川は文字通り県下の最強布陣で今年もこのシステムをとるようだと日進商会勢を主力に北村（全立教—日本発条、全日本B）らも加わりダークホース的存在になり得る。

このほか盛岡商友会（岩手）、伝統の清水勢を中心とした全静岡、名門桜丘会、中京ク（いずれも愛知）氷見ク（富山）紫ク（京都）、下関ク（山口）西南ク（福岡）、全長崎、熊本ク（熊本）の斗志に期待をかけたい。

女子

大洋デパート、完ぺきなチーム造りへ

追う一番手・三菱鉛筆

向上の一途をたどるという表現が少しもオーバーに感じられぬほど、最近の女子界は充実しきっている。

国際的にも日本の実力は高く買われかえすがえすも昨冬の世界選手権流会が惜しまれる。

気をとりなおしての新シーズン。実業団はもとより学生チームにも多くの有望高校生が進学したのが大きな特色である。
　しかし、実力的にはまだまだ実業団の天下は崩れそうにない。
　昨年三冠を飾った大洋デパート（熊本）は、新保につづいて射場が退いたものの、垂水、枝尾、渡辺、GK小原ら全日本級を軸に下枝、米を配した強力な布陣だ。
　井監督は『50分間フルに走り廻れるチームにしたい』と大きな前進を企っている。
　力プラス技、女子チームにはなかなか難しいことだが、昨年の試合ぶりをふり返ると、今年の大洋デパートは、この理想を実現しそうだ。
　新人は菊池農から村中、蔵田、剣の三人を迎えた。
　大洋デパートを追う一番手は三菱鉛筆（神奈川）だと思う。
　昨年は、全大会優勝候補にあげられながら惜しくも逸している。
　池田監督念願のダブルポストプレーが完成されれば、「打倒大洋」はもとより、「三菱時代」開幕を告げることができるだろう。
　メンバーは三井田、落合、阿部両佐々木、藤盛と6人が退部したが、これは後続の成長があってのこと。蓮見、鈴木、江川、GK吉田ら働き手がいぜん頑張っているし、ホープ姫野も、2年目をむかえ、いよいよ大器の本領を発揮しそうだ。
　新人は阿保（室蘭商）と林・阿部の湧谷高コンビ、それに滝（小島中）の4人である。
　全日本選抜で優勝の大崎電気（埼玉）は早川、鈴木、GK川崎のベテラン3人と加藤、中野が退部した。
　いずれも全日本のトップクラス。それぞれ個性を持った選手であり、果して今シーズン中にこの穴を埋めることが出来るだろうか
　主戦メンバーは小林、日向野、三浦、栗林、山崎照、GK山田となるが、新加入の山本、加藤（ともに新居浜市商）、志摩（小諸商）、山崎（上田城南高）、山中（小山城南高）、長谷川（二俣高）らの力も今年の成績を左右する一つのカギになりそうだ。
　〝昨年の4冠王田村紡（三重）は、世界選手権の代表にレギュラー全員が選ばれたことが、逆に不運となってついに昨年一年間を棒にふってしまった。
　これさえなければ、各大会での連勝はつづけられたであろうし、少くとも無冠というさびしい結果はさけられたハズだ。
　選手たちに動揺もあったようで水谷、清水、種村の退陣が決定的となり、小林、渡辺信、GK渡辺美それに甲村、三毛らで再建のスタートを切ることになる。

4強追う新鋭トリオ

　4強をはげしく追いあげ、互角の力を備えて来たのが東京重機（東京）。昨年のメンバーから畑岡が抜けただけ。期待どおり山本、滝口、鷺谷、GK川本らが安定したプレーを身につけ牧野、長谷川、伊藤も伸びた。新人はGK中川、村上の菊池農主力をふくめ古佐原（小高農）、長岡（小諸商）ら8人を数えている。
　『大崎、三菱のどちらかをたたいて国体出場』と近藤監督の抱負も威勢がいい。
　東海地区で田村紡をおびやかそうとしているのがブラザー工業（愛知）と大洋紡（岐阜）だ。
　ブラザー工業は楠田ら7人が抜けたが高山、皆川の元愛知紡組のほか浜島（名女商）松原（淑徳高）など合わせて9人が加った。
　朝倉、五十嵐、家田ら昨年の主力を中心に新加入者を配して若さにあふれたチームを編成することになろう。
　2年目を迎えた大洋紡は佐々木が抜けただけで森本美、真田、GK河村らが張り切っている。
　新人も強肩の西尾（紋別北高）をはじめGK高田（室蘭商）、山根（京都明徳商）、平野（加納高）らいずれもすぐ第一線に起用できる選手ばかり。なお今年から元愛知紡監督・新繁樹氏がコーチングスタッフに加った。

激しくなる日体—東女体大

　学生界の動きも活発である。昨冬の全日本選抜でナンバーワン日体大（東京）が菊池農高に敗れ、その実力をとやかくいわれたが、大いに奮起してもらいたいものだ。
　対学生の連勝をつづける日体大は川口、原、GK小野里と攻守の要が卒業した。津熊、沢谷、中村らを中心に永田、佐藤幸、佐藤温萩原、GK秋間など若い力が今シーズンのポイントだろう。新人の中では木村（精華女高）が光る。
　日体大と互角の線にまでこぎつけた東女体大は、一気に追いぬく態勢を整えたようだ。
　熊谷、浅見、中島、高橋恭、高橋清（元愛知紡）、姫野がそっくり残ったところへ、菊池農の優勝主将・水上、阿部（秋田和洋高）GK坂野（花巻南高）翁長（小禄高）GK松田（菊池農）ら実業団羨望の有力選手が大量に入学している。日体大×東女体大の対決は昨年以上に白熱するだろう。
　東海にあって虎視たんたんとしている中京大（愛知）は砂浜、森（礼）、安田の攻撃力がいい。中京女大（愛知）とともに、関東勢に追いつき追いこせのムードはシーズンごとに高まっている。
　関西のリーダー格・大阪体大（大阪）も東西対抗の開始などが刺激剤となり、今年から本格的な活動を示すことになろう。

元気とりもどすかOG

　このほかの有力チームを探ってみると実業団では東北宗形製作所（福島）、近江絹糸、豊田紡（いずれも岐阜）、学生では東京教大、国士館大、東京学芸大（いずれも東京）松阪女大（三重）、大阪薬科大（大阪）の動きが目立とう。
　クラブ界では田井、北口、古川ら日体大OGを中心とした大阪スターズ（大阪）が活発に動いているようだが、全和洋（秋田）、全湧谷（宮城）、氷見ク（富山）寝屋川ク（大阪）といった名門高校OGも元気をとりもどして来た。全岩手、全福井、全広島、愛媛クら全県編成の傾向も強まっている。
　日女体大（東京）のカムバックや愛知女子教員クの発足といった朗報がある一方、実業団では愛知紡のチーム解消のほか日電高畠（山形）、ほていや（長野）らが〝開店休業〟になりそうなのはさびしいニュースである。

（おわり）

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

杉山　茂
藤本　強

ソビエト、安定の攻守

東ドイツ、フランス両国にソビエトのトップクラスを集めた3チームが加って3月30日から4月3日までの5日間、トビリシ市（ソ連）で国際リーグ戦が開かれた。

今シーズン初めてといってもよいソビエトナショナルチームの登場はファンの注目を集めたが、緒戦で有力チーム・東ドイツを制した余勢をかって全勝優勝した。

その安定した攻守は、来春の世界選手権でも大いに力を発揮しよう。

ソビエト新人　21―16　フランス
ソビエト　25（11―10、14―10）20　東ドイツ
フランス　19―18　ゲオルジエ（ソ連）
ソビエト　29―25　ソビエト新人
東ドイツ　21―15　フランス
ソビエト新人　25―21　ゲオルジエ
東ドイツ　30―16　ソビエト新人
ソビエト　36―17　ゲオルジエ
ソビエト　20―12　フランス
東ドイツ　23―13　ゲオルジエ

【順位】①ソビエト②東ドイツ③ソビエト新人④フランス⑤ゲオルジエ

ソビエトの陣容をみる

この大会に出場したソビエト・ナショナルの主戦メンバーは上掲のようなものであった。

GK｛ヴィルソン、イチエンコ
FP｛コゴウチョフ、マキシモフ、クリモフ、カイユク、グルビス、ズドレンコ、マショリン、ソロムコ

クリモフ、ソロムコらは前回の世界選手権（昭42、スウェーデン）で4位になった時の主力である。

GKヴィルソン、ズドレンコ、カイユク、グルビスらは昨年春の第3回世界学生の優勝メンバー。

ソビエト新人はまったくこれまで中央で名の知られていなかったメンバーで固められスクルガ、スルビス、GKシスチエリィといった連中がこの大会では活躍した。

ゲオルジエ（単独チーム＝英読みではグルジニア）はすでにブカレスト国際リーグ（＝本誌61号既報）にもソビエトを代表している強力なクラブだが、攻守の要は世界学生優勝のフクハカーゼで、このほかツエルスバーゼ、ネドベイロ、ガゼデリアニといったところのプレーが目立った。

チエコ、ユーゴが対戦

アイバッハ国際トーナメントは4月3、4、5の3日間、チェコ、デンマーク、西ドイツ、ユーゴの4ケ国ナショナルチームが参加して開かれた。

チェコとユーゴは来春の世界選手権大会の予選で日本と同じ組に入ると伝えられており（＝本誌前号参照）その対戦が注目された。

ユーゴは前半、迫力のある攻撃で4点の優位に立ったが、優勝を狙うチェコは鮮やかに逆転勝ちした。チェコの地力はやはり相当なものだ。

前回の世界選手権で決勝戦を争ったチェコ×デンマークは熱戦の末引き分け。

チェコ　17―15　西ドイツ
デンマーク　22―18　ユーゴ
ユーゴ　22―15　西ドイツ
チェコ　16（分）16　デンマーク
チェコ　19―18　ユーゴ
西ドイツ　19―17　デンマーク

【順位】①チェコ2勝1分②デンマーク1勝1敗1分③ユーゴ1勝2敗（得58、失56）④西ドイツ1勝2敗（49、56）

スペイン、ラテン杯に勝つ

第7回ラテンカップ国際リーグは3月末マドリッドに地元スペインなど4ケ国が参加。スペインとフランスがともに2勝1分で首位となり、ゴールアベレージでスペインの優勝が決まった。

フランス　19―15　モロッコ
スペイン　21―10　ポルトガル
フランス　14―10　ポルトガル
スペイン　21―14　モロッコ
ポルトガル　20―12　モロッコ
スペイン　16（分）16　フランス

【順位】①スペイン2勝1分（得58、失39）②フランス2勝1分（49、34）③ポルトガル1勝2敗④モロッコ3敗

ソビエト女子、地元で勝つ

女子世界選手権の流会を余儀なくされたソビエト協会は、その代行としてこのほど「モスクワ招待国際女子トーナメント」を開いた。

参加したのは世界選手権保持国ハンガリーをはじめ東ドイツ、ルーマニア、ポーランド、ブルガリア、ソビエトの6ケ国で、リーグ戦を行った。

その結果、地元ソビエトと、ブカレスト杯優勝（＝本誌前号既報）の東ドイツが4連勝して対決7―7とゆずらぬ攻防を見せ同率で並んだ。

大会規定により得失点差で2点上廻ったソビエトが優勝と決まった。ハンガリーは3位だった。

東ドイツ　12―8　ルーマニア
ハンガリー　11―7　ポーランド
ソビエト　14―5　ブルガリア
ポーランド　15―10　ブルガリア
東ドイツ　13―9　ハンガリー
ソビエト　16―11　ルーマニア
ハンガリー　10―7　ルーマニア
ソビエト　16―6　ポーランド
東ドイツ　19―6　ブルガリア
ルーマニア　11―10　ブルガリア
東ドイツ　14―8　ポーランド
ソビエト　14―7　ハンガリー
ポーランド　11―10　ルーマニア
ハンガリー　7―3　ブルガリア
ソビエト　7（分）7　東ドイツ

【順位】①ソビエト4勝1分（得67、失38）②東ドイツ4勝1分（得65、失38）③ハンガリー3勝2敗④ポーランド2勝3敗⑤ルーマニア1勝4敗⑥ブルガリア5敗

（杉山）

スイス球界　今冬の状況

スイスの球界では、11人制がまだ盛んに行なわれており、7人制は冬季のシーズンに行なわれる従の立場におかれている。

7人制では、Bクラスという位置に置かれているが、最近では、かなり腕をあげてきている。

スイスでは、7人制は8チームによる二回戦方式のリーグで行なわれている。一回戦の総当りがおわったところでは、グラスホッパ

ーズが快調にとびだしている。

グラスホッパーズはスイスでは古くから強豪として知られているチームで、毎年スイス球界では、上位にランクされ、ヨーロッパ杯にも、しばしば顔を出しているチームである。

第二位にピタリとついているのはフィデス・St・ガレンで、この両チームの試合は次のような結果であった。

グラスホッパーズ（チューリッヒ）　18（7−8、11−4）12　フィスデ・St・ガレン

前半劣勢であったグラスホッパーズは、後半多いに押しまくり、前半の劣勢をはねかえし、6点の差をつけて、宿敵を破り、トップにでた。

グラスホッパーズは、St・ガレンと対戦する前、現在三位にいるファドフ・ヴィンテルフルに一敗し、St・ガレンは四位のSt・オトアールに一度土をつけられていた。

グラスホッパーズは6勝1敗、フィデス・St・ガレンは5勝2敗、ファドフ・ヴィンテルフルは4勝3敗で得失点差＋1、St・オトマールは4勝3敗で得失点差−1、5位はBSVベルンで3勝4敗得失点差−1、次が古豪StV・St・ガレンの3勝4敗得失点差−12、ATVバーゼルの2勝5敗、最後がRTVバーゼルが1勝6敗で折り返し点をおりかえしている。グラスホッパーズがこのまま逃げきり、70年度のヨーロッパカップ出場権を握るか、あるいは他チームが巻き返すか、興味がある。

また、BリーグではUS・チューリッヒ、TSGベルンが好成績でAリーグ入りを果そうとねらっている。

世界選手権の予選で対戦することになっているルクセンブルグとスイスはスイスBチームがルクセンブルグとバーゼルで対戦しているが、スイスBがもち前のボール技術とパスの技術を駆使して前半3−2から一挙にルクセンブルグを引き離して快勝した。後半もその調子をスイスBは持続し、大差をつけた。

スイスB　25（15−7、10−6）13　ルクセンブルグ

デンマーク球界今冬の状況

国際試合では、このところ、やや元気のないデンマークだが、いざという時には、7人制ハンドボールの故地にふさわしい活躍をすることと期待されている。

国内の試合を盛んに行なわれており、国内リーグはたけなわというところである。

今冬は、ステルネン・オデンゼーが快調にとばし、有名チームのHG・コペンハーゲンをリードしている。

手許の情勢では、ステルネンが、13試合を消化し、勝ち点19：7と11試合をこなし、勝ち点17：5のHG・コペンハーゲンをリードしている。HGは、今後の試合を勝ち進めば、ステルネンの上に出られる。優勝は完全にこの2チームに限定されている。

というのは、三位のアルフス・KFUMが勝ち点15：11、四位のスコブバッケンが14：10、以下、エフタースラエグテンの13：11、ヘルジンガー・IFの13：11スタヂオンが12：10、アジャックスが7：17、MK31が7：21、フレデリキア・KFUMが5：21となっているのだから、この両チームの中から今季の優勝がでるのはまちがいあるまい。

ステルネンとHGが図抜けた強さをほこっているが、おそらく、昨年の勝者HG・コペンハーゲンが優勝することになるであろう。

アイスランドではハンドボールがスポーツの第一位に

このところ快調に国際試合を進めているアイスランドでは、ハンドボールの人気は急上昇している

今シーズンを各国を首都のレイキャビックに招待し、大いに力をつけていることは馬場太郎氏の欧州だよりの中にも多く語られている。

今冬も各国と盛んに試合を行なったが、主な対戦は西ドイツに21−22、14−24と二敗、チェコとは17−21、12−13と二敗、しかし、どちらもきわめて、接戦を行なっているのは多いに注目されるところである。

7人制ハンドボールのアイスランドでの歴史はきわめて古く、すでに1926年から行なわれていたが、それは高等学校に限定されており、中々一般には普及が進まなかった。

しかし、60年代になって、盛んに国際試合を行なうようになり、遠征とともに、一流諸国を招待し多くの国際試合を国内で行なうことによって強化につとめるとともに、これがおおいに普及にも役立っている。

正に現在では、第一位のスポーツに成長している。ヨーロッパの北にある島国だけに、他のヨーロッパ諸国とは立地の条件がやや悪いが、非常に多くの国際試合を行なっている。

ためしにこれまでに行なわれた試合をあたってみると、デンマークに1勝7敗、スウェーデンに1勝4敗1分、チェコは5敗1分、ドイツには6敗、ルーマニアには3勝2敗アメリカ合衆国とは4勝、フランスとは1勝2敗、ノルウェー、ハンガリーにはそれぞれ2敗、ポーランドとは1勝1敗、ソ連に2敗フィンランドとは1分、アラブ連合に1勝の記録となっている。

国際試合に力を入れることがいかに普及と強化に役立つかを、アイスランドは実をもって示したといっても過言ではあるまい。

昨年、日本にも、ヨーロッパ遠征の帰途でもようないかと招待するアイスランドの積極策は地理的にやや似ている我が国も多いに見習うべきであろう。

チェコ、スウェーデンに接戦の末2敗

今冬の国際試合では、種々の異変が生れていることは既に本誌でも度々報じてきたが、今回は去る1月に行なわれたスウェーデン−チェコ戦の模様を伝えることとしたい。

世界選手権者であるチェコは力をもちながら、今冬、国内の複雑な状勢を反映してか、今一歩の力を発揮しきれないでいる。

スウェーデンは今冬ノルウェーに破れるなど、完調ではないが、この両チームの対戦は大きな期待をもって見られていた。

第一戦はスウェーデンのゲーテボルグのメッセ体育館に三千五百の観衆を集めて行なわれた。

スウェーデン 17（9—9、8—5）14 チェコスロバキア

得	【チェコ】		【スウェーデン】	得
0	フランティセリ・アルノスト	GK	フランク・ストレーム	0
0	ジャロスラブ・スカルバン	GK	ウルフ・ヨーンソン	0
1	テディスラフ・ベネス	Fp	ブジエルン・ダネル	0
2	バクラフ・デューダ	Fp	ゲスタ・カールソン	0
2	ハドルフ・ハブリク	Fp	ベングト・ヨハンソン	0
0	フランティセク・ヘルマン	Fp	クルトゴラン・キュエル	2
4	オトカル・クラナート	Fp	ジェリー・ロゼングレン	0
1	ジャロスラフ・コネクニー	Fp	ジヤン・ライマン	2
1	アントニン・マレス	Fp	ジヤン・ホディン	2
3	ボジュテク・マレス	Fp	ゲラン・ハルド	4
0	ジャロスラフ・ポドリガラ	Fp	レンハルト・エリクソン	6
0	イヴァン・サトラパ	Fp	ミハエル・コッホ	1
14	（2）	7MT	（5）	17

（審判）クヌート・ニールソン、カイ・フズビー（ノールウェー）

試合が始まるとチェコは良くとばし、1—5と13分には、4点のリードを奪った。ここでスウェーデンは、キーパーをヨーンソンに交替し、すぐ1点をかえした。その後、チェコは1点をとり、6—2にしたが、スウェーデンはこのあと良く追い、エース、エリクソンを中心に好シュートを放ち、8—8のタイにこぎつけた。その後たがいに1点ずつをあげ、9—9で前半で終了した。

後半に入ると、スウェーデンはすぐに1点をとり、この試合はじめて、リードをした。チェコもすぐ追いつき、10—10、このあとスウェーデンは12—10と2点をリードし、そのままのリードを保ち、チェコが追いつくと、スウェーデンがつきはなすという形で、スウェーデンがそのまま勝利を握ることに成功した。

この試合、スウェーデンは守りのキーパー、13分で交替したヨーンソンの活躍がまずあげられる。この交替から、スウェーデンはチームのリズムを摑むことができた。

攻撃面では、ゲラン・ハルドが良く4点をあげたことと、エースエリクソンが7MT4本を含め、6点をあげた活躍がスウェーデンを勝利に導いた。

スウェーデンがチェコを破って二日後、場所はゲーテボルグからマルモに移って、スウェデン—チェコの第二戦が行なわれた。

マルモのバルティスカ体育館に三千の観衆を集め、第二戦はデンマークからの国際審判員、ポールオブダール、アーゲ・グドニッツの両氏が審判をつとめた。

この試合も両者ゆずらぬ熱戦が展開されたが、チェコのリードをスウェーデンが追うという前の試合同様の経過をとり、スウェーデンが勝利を握った。

スウェーデン 12（3—5、9—5）10 チェコスロバキア

得	【チェコ】		【スウェーデン】	得
0	ジャロスラブ・スカルバン	GK	ウルフ・ヨーンソン	0
0	フラレティセク・アルノスト	GK	フランク・ストレーム	0
0	アルノスト・クリムシク	FP	ブジェルン・ダネル	0
2	ボジュテク・マレス	FP	ゲスタ・カールソン	2
2	ジャドスラフ・ポリドガラ	FP	トミー・ジャンソヴ	0
0	フランティセク・ヘルマン	FP	ベングド・ネドバル	0
3	ルドルフ・ハブリク	FP	ジェリー・ロゼングレン	1
0	ラディスラフ・ベネス	FP	ジャンエリック・フリーデン	0
0	ウラディミール・ドレカク	FP	ジャン・ホディン	0
2	バクラフ・デューダ	FP	ゲラレ・ハルド	0
1	オトカル・クラナト	FP	レンハルト・エリクソン	9
0	イヴアン・サトラパ	FP	ミハエル・コッホ	0
10				12

スウェーデンは先日の試合で巧技を見せたキーパーはヨーンソンヨーンソンはストレームと代ることなく、一試合中ゴールを守ることになった。この起用が図に当ったのはスコアが示すとおりであるフィールド・プレーヤーも主力はそのままであるが、かなりの人数を入れかえた対戦であった。

一方、チェコも主力はそのままであったが、コネクニーが欠場。

キーパーは先日のアルノストに代って、スカルバンがゴールに入り、相手の7MTの時に2度アルノストがゴールに入っただけであった。ピンチ7MTだけでなく、7MTにキーパーがそのためだけにでてくるという形もヨーロッパではとられはじめているようである。

得点は前半はチェコがリードしそれをスウェーデンが追いかけるという形で3—3まで進んだが、その後、チェコが2点を連取し、3—5で前半を終了。このように得点が少なかったのは、両チームのキーパーの好守があったからに他ならない。

後半に入ると、スウェーデンはすぐに1点をかえし、それをチェコがつきはなし、スウェーデンが追いつき、6—6、7—7と進んだが、チェコは9—7とリードした。その後、スウェーデンはエース・エリクソンを中心にした攻撃で、4点を連取し、11—9と2点のリードを奪い、そのまま押しきった。

チェコは、好技のマレス、ハブリク、デューダを入れてのこの敗戦はたとえ、敵地に入っての試合といえ、かなりのショックであったようである。このように、チェコが好調でないので、その二連覇は困難であろうとの見方が強まっている。

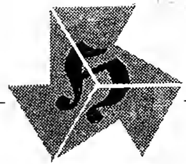
スウェーデンはキーパー、ヨーンソンの活躍、エリクソンの大量得点を軸に世界選手権者を見事に破る快挙をなしとげた。

このように今冬の世界の状況は正にこんとんとしているが、世界選手権、しかもオリンピックの出場権をかけた世界選手権をめざす各国の強化は着々と進んでいる。

この中で、今日もっとも前評判の高いのは、ルーマニアと西ドイツであろう。両チームとも破竹の進撃をしている。これに一歩遅れて、チェコ、ユーゴー、東ドイツソ連、デンマーク、スウェーデンの諸国が続いているというのが、今冬のヨーロッパ球界である。

もっともスコアだけでは明確な審判は困難である。ここ一発になると力を出すチーム、ここ一発になるとだめになるチームといろいろある。これまでの結果を見ていると、チェコは後半に点をとって逃げるのが得意なようだ。これをとらせないこと、それと主力がかなり年をとってきたこと、この辺にチェコを破る鍵があると思われる。日本選手団の活躍が期待される。

（藤本）



高体連、20周年を迎う ②

注目と期待のうちに開かれた第1回全日本高校選手権（25年8月藤井寺）は盛況裡に終わった。

役員をつとめた指導者の努力も見のがせないが、炎天下にぶつかりあう高校選手の意気と力、そして試合を終えたあとの若者たちのすがすがしい表情が、この大会をささえる〝すべて〟であった。

第1回の優勝は、男・足利高（栃木）、女・操山高（岡山）の飾るところとなった。

男子は前評判の高い天王寺高（大阪）が順当に決勝へ進み、足利高の苦戦はまぬがれないとみられていたのだが、前半の最少差を最後まで守り切り初の栄冠を掌中にした。

天王寺高は、第2回国体（昭22）から3連勝し、24年、25年の東西対抗にも勝つなど安定した力を誇り、トップゾーン大阪の代表としてこの大会でも優勝候補の最右翼に推されていた。

それが、無名ともいえる足利高に敗れたのは、いかにも高校生の大会らしい波乱であったといえよう。

優勝監督渡辺繁氏は『出発前から優勝などは夢にも考えておらず一回戦か二回戦で帰足するつもりだった』と語っており〝無欲の生んだ勝利〟といえた。

女子は予想どおり岡山勢によって優勝が争われた。

女子界における岡山の力は戦前から着実に伸ばされ、戦後はいっそうゆるがぬものとなった。

操山×青陵という県内のライバルが全日本の桧舞台のしかも第1回決勝で相まみえたことは岡山関係者の努力の結晶ともいえよう。

操山高は岡山一女として前年の国体高校で初優勝、青陵高は戦前の強豪倉敷高女を前身に倉敷女子中—倉敷精思高という名を経て、この間国体の高校、一般でつねに上位の成績をあげて来た。

試合ははたして接戦となり4—4から延長へもつれこみ、第一延長は無得点、第二延長前半操山が1点を先行し、後半青陵の猛反撃を互角にかわして遂に優勝をかち得た。

有力といわれた大阪勢はベストフォアに1校も残れなかった。

大阪女子界の充実は、国体一般女子4連勝（第1回〜第4回）をはじめ高校界も岡山勢との対決に勝って最上位に君臨、この大会でも出場した4校すべてが優勝候補にあげられていたのだが春日丘高桜塚高、梅花高、寝屋川高と揃って準々決勝で敗退、特に春日丘高が落合高（岡山）に降った一戦は大きな番狂せといえた。

春日丘高は2ヶ月後の第5回国体で青陵を破り優勝、夏のうっぷんを晴らしている。

桜台高、快調の三冠王

第2回大会は26年6月東京駒沢で開かれた。

ちなみに、設立数年間は大阪（藤井寺）と東京で交互開催という申し合せが行われており、このくり返しは第7回（昭31）まで守られることになる。

県予選が確立され男子は東京、大阪、静岡、岡山、栃木が2校を送った以外は各県1校、女子も東京、大阪、岡山だけが2校だった。

このため参加校数は男子34、女子25（うち棄権3）と少くなり、会期も前年より1日少い4日間に短縮された。

しかし、内容的には前年をはるかにうわまるものがみられた。

しれつさを増した県予選と、全国大会をめざす各校の努力によるものであったことは多言を要すまい。連続出場を果たしたのが男子16、女子14校というのをみてもそれが判る。草創期にとかくみられがちな実力偏重の傾向が少いのは斯界のそのごの発展にどれだけ寄与したことだろう。

高校界が日本球界をささえて来たという一事をここでも知るのである。

さて、第2回大会の話題は男子優勝の桜台高（愛知）であった。

初出場ながら、激戦の愛知予選を勝ち抜いた実力は高く評価されその定評どおりの試合ぶりで栄光に輝やいた。

決勝の相手は同じ東海地区の清水商（静岡）であったが、これ以後第14回大会（昭38）まで、東海地区の代表は必ず決勝まで勝ち残ることになり、そのうち11回を優勝へ結びつけるという圧倒の実績を刻む。

桜台高の高校生ばなれした攻守はそのスタートを飾るにふさわしいものであり、しかも同校はこの年10月の国体、11月の東西対抗にも勝つて〝三冠独占〟という偉業を成し遂げた。

高校東西対抗はこの年をもって打ち切られたから、高校界の三冠王というのは、この年が最後のチャンスであり、高校生の技心を考えればとうてい難事ともいえたのだが桜台高はみごとにやってのけたのである。

桜台高は、この年公式戦55連勝という快記録をマークした。

三つの全日本タイトルを含むこの記録は、昭和34〜35年の芝浦工大47連勝とともに日本球界連勝記録のうち、もっとも高い内容を持つものといってよいだろう。

ちなみに桜台高の連勝は、26年12月中部日本選手権決勝で夏のライバル清水商に延長の末9—12と敗れストップした。

女子は前年準優勝に泣いた倉敷青陵高が、これまた「今年こそ」の意気に燃えた春日丘高を予想外の大差11—1で降して優勝をとげた。決勝での10点差という記録は未だに破られていない。青陵高は10月の国体にも勝ってこの年はダ

ブルクラウンである。

なお、前年優勝の男・足利高は1回戦で金沢二水高（石川）に敗れ早々と姿を消し、女・操山高も準々決勝で宿敵春日丘高に降った。

26年で終会の東西対抗

桜台高三冠達成の舞台となった高校東西対抗は、前述のとおりこの年（26年度）で終幕した。

インター・ハイという全国一堂の宿願が実現し、国体も残るとあっては、東西対抗の目的は果されたわけだ。

しかし、前号でも記したようにこの大会は東日本高校、西日本高校各選手権を経てその勝者で争われる「高校王座決定戦」ともいうべき性格をもっていたのだから、高校ハンドボール史上、かなり大きなウェートをもって記憶されるべきであろう。

東西対抗はもとより、東日本、西日本両大会についても高校生のひたむきな情熱をめぐるエピソードは多いようだが、紙数の関係で本稿では東西対抗の記録のみを掲げるに留めておこう。（第1回記録は前号参照）

【第2回・昭和24年2月6日・愛知県一宮市】

▽男子

天王寺（西・大阪）6（5－1 1－2）3 鎌倉学園（東・神奈川）

▽女子

倉敷高女（西・岡山）2（1－1 1－0）1 足利女（東・栃木）

【第3回・昭和25年1月8日・香川県丸亀市】

▽男子

天王寺（西・大阪）6（2－1 4－1）2 世田谷工（東・東京）

▽女子

寝屋川（西・大阪）4（3－0 1－1）1 一宮（東・愛知）

【第4回・昭和26年1月7日・静岡市】

▽男子

一宮（東・愛知）3（2－1 1－0）1 天王寺（西・大阪）

▽女子

寝屋川（西・大阪）8（3－1 5－1）2 涌谷（東・宮城）

【第5回＝最終回・昭和26年11月23日愛媛県今治市】

▽男子

桜台（東・愛知）4（4－0 0－1）1 津成美（西・岡山）

▽女子

静岡城北（東・静岡）5（1－3 2－0 …… 1－1 1－0）4 落合（西・岡山）

5回の結果をまとめてみると男子は東軍の3勝2敗、女子は西軍の4勝1敗。県別の優勝は男子が大阪、愛知各2回と東京1回、女子が、岡山、大阪各2回と静岡1回である。

なお、この大会はピリオドを打ったが東日本、西日本両選手権はその後三〜四年打ち切られずつづけられた。

年毎に優勝校変わる

第3回大会（昭27）は再び大阪・藤井寺へ移り、男子34、女子22校が参加して行われた。

男子の焦点と目された桜台高の進撃は準決勝で桐生工（群馬）に阻止され、余勢をかった同校が、2年連続決勝へコマを進めた清水商をも降して初優勝を飾った。

決勝戦は白熱、清水商の粘りから4－4で延長となり、第一延長の前半は1－1（5－5）、すべてをかけた後半、桐生工の攻撃は気力をふりしぼって3点をたたき出し結局9－7で感激の初優勝をとげた。

女子は着々と地力を加えて来た寝屋川高（大阪）が決勝で2連勝に自信をもつ倉敷青陵高を5－4の僅差で退け、初めて岡山の手から大阪へ優勝林（高松宮妃杯）をもたらした。

第4回（昭28・駒沢）は男子で福島、埼玉、千葉、滋賀の3県、女子でも福島、埼玉が初めて代表を出場させるなどあって男41、女32と参加校数が伸びた。

女子で前年優勝の寝屋川高が緒戦で彦根東高（滋賀）に惜敗するという波乱の幕あけとなり、男子でも桐生工、清水商がベスト・フォアまでとどかずそのほか有力チームの苦戦が目立った。

結局男子は桜台高が2年ぶり2度目、女子は稲沢高（愛知）が初優勝した。男女同県の優勝は初めてのことであり、両校は10月の国体でも優勝、この年の高校界のタイトルはすべて桜台と稲沢に握られてしまった。

ところで、桜台高はこの年から5年連続優勝を記録することになる。高校界では、男女あらゆる大会をふくめての快記録はいぜん破られていない。今後もこれを更新することはできないのではなかろうか。

桜台高から巣立った選手たちはその後も学生界、クラブ界にあってその秀れた技巧をいかんなく発揮、日本を代表するプレイヤーへと成長していった。

高校時代に得た栄冠を傷つけまいとする努力もさることながら、夏の優勝をめざした苦しい基礎練習の反復と克己心が大きな自信と誇りになっていたのであろう。

トップゾーンをさぐる

第5回大会の開かれた29年は国体開催地が北海道であったため、8月にインタ・ハイと両大会が開かれる変則的な日程が組まれた。

そのためかベストエイトをみると男子は5校が、女子は4校が両大会共通であり、特に女子の寝屋川高は宿願のダブルクラウンを獲った。

大会が始められて5年ともなると、いわゆる伝統の強みと呼ばれる常勝校が各地で輩出されるようになり、安定した戦力を毎年示す全国的名門も何校かみられるようになった。

高校界の推移を知るためにも〝最初の5年間の名門校〟を調べてみよう。なお、各県代表のうち5年間連続出場を果したのは男子では天城高（岡山）ただ一校、女子では静岡城北高、那賀高（滋賀）、春日丘高（大阪）、明石高（兵庫）、倉敷青陵高（岡山）、明善高（福岡）の6校を数えるだけである。

全国大会のベストエイトは別表の通りだが、このうち最初の5年間に2回以上顔を出しているのは男子では3回優勝の桜台高を筆頭に準優勝2回の清水商、函館工（北海道）、足利高、桐生工、墨田川高（東京）、豊中高、北野高（ともに大阪）、天城高、山口高（山口）、済々黌高（熊本）の11校。

女子は2回優勝の寝屋川高、1回優勝、2回準優勝の倉敷青陵高のほか函館中部高（北海道）熊谷商工（埼玉）、静岡城北高（静岡）、稲沢高（愛知）、春日丘高、操山高の8校を数えるだけ。

男女を通して5年連続ベストエイトに進出したのは女子の春日丘高と倉敷青陵高の2校である。

春日丘高に優勝の記録がないのは不運というべきだろう。男子では桜台高と済々黌高の各4回が最高である。

なお、延べ40校を府県別にみると男子は大阪、愛知の各5校（延べ数以下同じ）岡山、熊本、静岡の各4校、山口、東京、栃木の各3校あたりが主なところ。女子は大阪の11校が群を抜き、岡山8校静岡、愛知4校がこれにつづく。注目されるのはこれら各府県は現在でも「日本におけるハンドボールの盛んな所」といわれる地区である。インタハイ草始期に強者を輩出した地区が、その後もひきつづき国内のトップゾーンとして活動しているという事実は興味深いし高校界の影響力というものを感じさせぬわけにはいかない。

地方での大会開催へ

こうして最初の5年間を順調に歩んだ高体連は、新たな意欲を燃やして昭和30年代へと入っていった。

普及面も男子を例にとれば第1回（昭25）の参加府県数は31だったが第5回（昭29）では35都道府県となり、全都道府県参加の目標に歩み始めた。

また大阪（藤井寺）、東京（駒沢）の交互開催も、社会的条件の好転なども手伝って再検討され、31年の第7回大会でこのシステムを廃め、それ以降は全国各地へ持ち廻わることになり第8回（昭32）開催地に愛媛県松山市、第9回北海道函館市、第10回宮城県仙台市などが決まった。

男子では桜台高が相変わらずの強味を見せた。第6回(昭30)に足利高、第7回下関幡生工（山口）第8回中京商（愛知）がそれぞれ決勝で挑んだがいずれも退けられ「打倒・桜台」は成らなかった。

中京商との一戦は史上初の同県勢による決勝戦で、これに勝って5連ぱの金字塔を築きあげた。

この5年間インタハイにおける桜台高の記録は25戦全勝、総得点三六一、総失点一五七というすばらしいもの。最僅少差試合は第4回の準決勝対天城高と第7回の準々決勝対小倉工（福岡）のいずれも8—6である。また5年間で相手に10点以上許したのは3試合だけだ。

このような勝ちっぷりをみせた桜台高も、この全盛時に県大会などではしばしば土をつけられている。先輩の建てた55連勝（前掲）は破れなかったのである。

しかし夏になると断然強い。冬場のいわゆるオフにおけるトレーニングに〝強さの秘密〟があったのではなかろうか。

球史に残る二つの延長戦

女子では、長かった岡山・大阪併立時代からまず岡山勢が後退、第4回の稲沢高—静岡城北高という初顔合せによる決勝をキッカケに、にわかに新進校の抬頭が目立つようになった。

第5回の決勝は強豪寝屋川高に九州の名門明善高が挑み、この時は寝屋川高が制したが、翌年は明善高—稲沢高の対戦から明善高が勝ち遂に優勝は関門海峡を渡った。

全国制はを遂げるため練習相手に男子チームを選んだり、ラグビー部と対戦したなどというエピソードがある。

第7回は寝屋川高、明善高、稲沢高、静岡城北高の4強が勝ち進み、準決勝の激斗をのりこえた寝屋川高と稲沢高が決勝で対決した。

群雄時代にふさわしくこの対戦は球史を飾る大試合となった。

前半の1点差を追う稲沢高は後半、逆襲に成功して延長。第一延長は互いに1点づつを入れあい、初の第二延長へもつれこんだ。

ここで稲沢は先行、そのまま逃げ切るかにみえたが、寝屋川高は驚異的な反撃を示し2点をあげて逆転してしまった。

10—9!!。勝者、敗者ともに涙にくれる一戦はまさに日本女子ハンドボール史上、特筆される好勝負である。翌年から女子は七人制の全面実施に移されたため、11人制時代最後の年ともなったわけでいっそうこの激戦は劇的なものに感じるのである。

この試合に優る内容は当分見られないのでは、といった声に反発するかのようにその翌々年の決勝寝屋川高—熊本市立高戦も、見る者を感動させるに足る名勝負であった。

その前年—つまり31年は女子・中学の公式試合をすべて7人制で行うことに決めた最初の年で、決勝は水海道二高（茨城）—羽咋高（石川）という予想外のカードとなり水海道二高が6—0と決勝史上初の零封勝ちで、初めて関東には権をもたらす快挙をやってのけた。

水海道二高は静岡城北高、羽咋高は寝屋川高を降しての決勝進出で新鮮な話題を呈した。

この年は国体でも熊本市立高が名門をおさえて初の全国制はを遂げている。11人制から7人制への転換をスムースにとらえた新星のタイトル獲得は、女子界の新スタートを飾るにふさわしいといってよかった。

こうして7人制2年目を迎えた33年は古豪・新鋭が入り乱れ、決勝は寝屋川高—熊本市立高という両者を代表するにこのうえない対戦となった。

試合は寝屋川高優勢のうちに進められたが、熊本市立高は後半5点をあげてタイとし延長、第一延長も前半は寝屋川高が先手をとったが、熊本市立高はまたしても後半に追いつき第二延長へと入った。

さすがに両校とも疲れが見え、気力と気力のぶつかりあいとなったが、決め手は容易に得られずついに9—9から史上初の引き分けによる優勝の分けあいという結末をよんだ。

第7回の決勝とこの試合は、高校界のというよりも、球史上、永く語りつがれるであろう熱戦譜である。

仙台で10周年祝う

波乱をふくんだ激斗をのりこえて高体連は34年にめでたく10周年を迎えた。

1月現在の加盟校数は37都道府県協会から男女あわせて四百三十九校と発表された。

10年目を祝う行事はインタ・ハイ開催地仙台市で華々しく行われ発展に貢献のあった74氏に表彰状13氏に感謝状が贈られ、これまでに6回優勝の男・桜台高、4回優勝の女・寝屋川高も表彰された。

また、35年3月に発刊された「全高体連ハンドボール部十周年記念誌」は、球史をひもどく貴重な資料である。

記念大会ともいうべき第10回大会は男子37、女子34校が参加して行われた。

男子はその前年、常勝桜台高が清水商のために準々決勝で屈して6連勝を阻まれるビッグニュースがあった。

大敵を倒した清水商は準決勝で徳山高（山口）、決勝では兵庫工と上り坂の両校を降して宿願の優勝を飾った。

過去2回の準優勝、26年には当時破竹の進撃をつづけた桜台高の連勝をブロック大会でストップさせた清水商の実力は高く買われていたのだが、9年目にして野望を実らせたのである。

その清水商が記念大会では2回戦で鎌倉学園（神奈川）に敗れたほか、かっての優勝校足利高、桐生工それに桜台高までもが県予選で姿を消すという〝異変〟があった。男子界でもようやく新しい舞台が開くことを意味していたのである。

ベストエイトもいつになく新顔が並び、決勝は桜台高を県予選でおさえた中京商（愛知・現中京高）と鎌倉学園の激突となった。試合はスピード豊かな大型の展開となり、中京商が前半の2点差を辛くも守って初優勝した。

中京商は高校野球界ではすでに全国に名の知られた名門。スポーツを建学の精神の一つにしており4年前に部を創設したばかりだった。桜台高という大目標が身近かにあったことも、この〝高度成長〟を助成したのである。以後、36年の第12回まで3連ぱするのだがそれは次号へゆずろう。

女子は、因ねんの熊本市立高と寝屋川高が2年連続して決勝で相まみえた。前年同よう1点を争う好ゲームとなったが、着実に先行した熊本市立高が感激の優勝杯を手にするところとなった。

伝統の早朝練習に代表されるハードトレーニングが〝伝統のカベ〟を打ち破ったのである。

同校は翌年も優勝を飾り、引き分けの前年をふくんで史上初の3連ぱという大偉業を達成することにつなげる。【文責・編集部】

全日本高校選手権決勝記録とベストエイト①（第1回～第10回）

○…… 男　子 ……○

▽第1回　足利（栃木）　4（2—1, 2—2）3　天王寺（大阪）
麻生（茨城）、墨田川（東京）、矢掛（岡山）、山口（山口）、済々黌（熊本）甲南（鹿児島）

▽第2回　桜台（愛知）15（8—2, 7—2）4　清水商（静岡）
石橋（栃木）、墨田川、世田谷工（東京）、北野（大阪）、操山(岡山)、山口

▽第3回　桐生工（群馬）　9（2—1, 3—4, 1—1, 3—1）7　清水商
足利、時修館（愛知）、桜台、豊中(大阪)、福陵（福岡）、済々黌

▽第4回　桜台　8（4—2, 4—1）3　函館（北海道）
桐生工、小松実（石川）、沼津東（静岡）、北野、天城、済々黌

▽第5回　桜台　12（5—5, 7—4）9　豊中
函館工、上田松尾（長野）、清水商、津山（岡山）、岩国工（山口）済々黌

▽第6回　桜台　10（9—1, 1—4）5　足利
明星（東京）、清水商、豊中、那賀（和歌山）、天城、済々黌

▽第7回　桜台　10（3—1, 7—3）4　下関幡生工(山口)
明星、小松実、瑞陵（愛知）、豊中、新居浜工(愛媛)、小倉工(福岡)

▽第8回　桜台　18（6—5, 12—5）10　中京商（愛知）
函館工、上田松尾、那賀、兵庫工（兵庫）、下関幡生工、済々黌

▽第9回　清水商　12（7—6, 5—4）10　兵庫工
盛岡（岩手）、仙台二（宮城）、桜台、氷見（富山）、那賀、徳山

▽第10回　中京商　15（7—5, 8—8）13　鎌倉学園(神奈川)
神代（東京）、三国丘（大阪）、兵庫工、津山商（岡山）、新居浜工、熊本市商（熊本）

○…… 女　子 ……○

▽第1回　操山（岡山）　6（2—3, 2—1, 1—0, 1—1）5　倉敷青陵（岡山）
潮来（茨城）、桜塚、寝屋川、梅花、春日丘（以上大阪）落合(岡山)

▽第2回　倉敷青陵　11（6—0, 5—1）1　春日丘
涌谷(宮城)、甲府二(山梨)、静岡城北(静岡)、一宮(愛知)、大谷(大阪)、操山

▽第3回　寝屋川　5（3—2, 2—2）4　倉敷青陵
平沼(神奈川)、高岡中部(富山)、静岡城北、稲沢(愛知)、春日丘、玉名(熊本)

▽第4回　稲沢　6（2—3, 4—2）5　静岡城北
函館中部(北海道)、熊谷(埼玉)、彦根東(滋賀)、春日丘、倉敷青陵、熊本市立(熊本)

▽第5回　寝屋川　5（2—2, 3—0）2　明善（福岡）
函館中部、熊谷商工、静岡城北、稲沢、春日丘、倉敷青陵

▽第6回　明善　6（3—1, 3—3）4　稲沢
函館中部、水海道二（茨城）、静岡城北、寝屋川、倉敷青陵、熊本市立

▽第7回　寝屋川　10（5—4, 2—3, 1—1, 0—0, 0—1, 2—0）9　稲沢
函館中部、太田二（茨城）、静岡城北　県尼崎(兵庫)、倉敷青陵、熊本市立

▽第8回　水海道二　6（2—0, 4—0）0　羽咋（石川）
静岡城北、寝屋川、県尼崎、今治西（愛媛）、倉敷青陵、熊本市立

▽第9回　寝屋川　9（4—1, 2—5, 2—1, 1—2, 0—0, 0—0）9　熊本市立　～両校優勝～
水海道二、山梨（山梨）、静岡城北、半田（愛知）、県尼崎、徳山（山口）

▽第10回　熊本市立　10（3—2, 7—6）8　寝屋川
水海道二、静岡城北、半田、那賀、京都女（京都）、徳山

▼第11回以降の記録は次号

フランスの技術研究（最終回）

基礎練習が何よりも大事

藤　本　　強

フランスの技術研究は今回を含め19回を、ルネ・リキャル氏の「7人制ハンドボール」を中心にして見てきた。

前号ですでに触れたように、今回で終回にすることにする。長い間の御愛読を感謝致します。

一昨年の7月号（44号）から連載を始めたのですから、もう二年近くもたっています。月日のたつのは早いものです。

まず、7回にわたって、個人技術を見てきました。その後11回をかけて戦術をざっと見てきて、今回がその最終回という訳になりました。

今回は、これまで見てきたことのまとめとして、重要な点を列挙してみたいと思います。

技術編

ここでまず十分に時間をかける練習としては、基本姿勢があります。

これは、ハンドボール競技の特性ともいうべき、前後左右へのスタートに必須のものです。

これとともにフェイントの練習ただ単に基本姿勢からスタートし走る、フットワークだけでなく、ボールを使う以前に、ぜひともかなりの段階まで、常に練習をし、それとともにフェイントを十分に使えるようにしておかなければならない。

次にボール扱いになると、キャッチがもっとも重要な条件になってくる。重要なものとされているパスも、しっかりしたキャッチがなければ、パスはでないのは云うまでもないことであろう。

良いキャッチをすること、これが、基本姿勢について、ハンドボールの基本になろう。これにパスが加わると、ハンドボールの基本をなしている走、投、捕の要素がすべて整うことになる。この基本の上に種々の特別の技術が加わり一流選手が生れることになる。

何といっても、この基礎技術はとかく軽くみられているので、くりかえし、常に練習を行なっていくことが必要になろう。戦術練習、高度の技術練習の中に、たとえ短時間であっても、必らずおりこむような練習計画をたてることを考えるべきである。

とかくこのような基礎練習は単調になり、つまらない印象を与えプレーヤーもただ単に時間さへすぎればという形になりがちであるので、基礎練習がいかに重要であるかを十分に認識させるとともに変化をもたせることも必要であろう。

フットワーク、ランニング、キャッチの次に基礎技術として重要なのはパスである。種々のパスを十二分に練習しておかなければならないのは、云うまでもないことだが、もっとも重要なことは、動きながらキャッチ、パスをすることである。静止した状況で、静止した相手にパスをしていたのでは、実際のゲームの際には、ほとんど役にたたない。少しでも、動きながらパスを、動いている相手にパスをするのでなければ、ハンドボール競技には、なかなか結びつかない。

それとディフェンスをつけたパス、これも忘れてはならないものである。

これらの基礎技術はくりかえししかも常に練習しなければならない。練習を怠ると、どうしてもプレーが粗雑になり、つまらなりミスをおかすことになる。

特にパスはとっさの判断で、時間的（タイミング）、空間的（位置）にもっとも適し、しかも、スピードとその状況にもっともふさわしい投げ方でパスをしなければならないのであるから、動きながら、ディフェンスをつけたパスはいくらやってもやりすぎるということはない。

これら基礎技術の上にたってはじめて、シュートなどの技術、その上で種々の戦術も可能になってくる。

シュートはハンドボール技術の中でもっとも中心的なものであることは云うまでもない。いかに巧妙にフォーメーションが組みたてられて、ノーマークがさかんに生みだされても、最後のツメにあたるシュートがまずくては、得点にならない。同様にいかにディフェンスの良いチームでも1点もとれなければ、勝つことはできない。

勝つためには得点をあげることが必要であり、得点をあげるためには、強力な巧妙なシュートが必要になってくるのは理の当然である。

シュートはその打つ位置によって大別するとロングシュート、サイドシュート、ポストシュートにわけることができよう。もちろんこの中には、その場その場の状況によって使いわけられる各種のシュートが含まれている。

形によって分類するとステップシュート、ランニングシュート、ジャンプシュート、倒れこみシュートなどに分けられよう。

これらがそれぞれの状況に応じて、とっさに使えるように、体で覚えていなければいけない。どのシュートにも習熟することは大変困難なことであるが、どのシュートもできないと、ノーマークになったが、シュートできないという困った状況にぶつかることになるどのようなシュートもこなせ、その上自分のもっとも得意なこの位置でこのシュートなら絶対に決めるというものをもつことも必要になろう。もちろん、これが多けれ

ば多いほど良いのは当然であろう。どこの位置から、どんなシュートでもこなせる選手ばかりでないと、戦術面でも大きな制限を受けることになる。

ある選手がサイドシュートができないとか、希にしか決らないというようなことがあると、その選手がサイドでノーマークになるようなフォーメーションは全く使用できなくなるという事態になるので、戦術面で大きな制限を受け、ディフェンス側は大変楽に試合を進めることができる。

このようなことのおきないように、あらゆるシュートをこなしておかなければならない。

戦術編

防御

防御の基礎になるのは、フットワークにある。これを基礎とした対人防御、これを充分に行なうことが、種々の防御フォーメーションをしく時の基礎になる―一人で一人の相手につききる。この対人防御の原則なしには、どのような守備フォーメーションをとってもさして意味はない。

従来は7人制ハンドボールの防御は地域防御が原則と考えられていたが、最今の状況は必ずしも、そうではなく、対人防御で一試合をとおすというチームも現われてきている。

一試合を通すスタミナと、十分な防御技術があれば、一人が一人につき、完全にマークするのであるから、これに勝るフォーメーションはないであろう。

しかしながら、一試合を対人防御で通すことは、スタミナの面から見て、中々困難であるので、地域防御が勢い採用されることになる。

地域防御は現在普通に使われているのは0―6防御（一線防御）もしくは1―5防御をとっていることが多い。

このほかに、割合に良く使われているフォーメーションに2―4防御、3―3防御がある。

どのフォーメーションも一長一短があり、状況に応じ使いわけることが必要である。ロングヒッターが多く、サイド攻撃がほとんどないチームに対しては、2―4ないし3―3防御を使う。サイド攻撃が主で、ロングヒッターのいないチームに対しては一線防御をしくといった相手に対する切替ができるようになっていなければいけない。

いずれのフォーメーションをしくにしろ、ボール保持者に対するディフェンスを厚くするようにすることが肝要である。

ボールを持っているものに対し少なくとも二人のディフェンスがチェックしている必要がある。ボールのあるサイドに厚く、ボールのないサイドはディフェンスを薄く、むしろカットを狙うような配置をとっていることが望ましい。

もちろん、ボールが動けば、その瞬間に守備配置は変っていなければならない。この時チーム内の一人でも遅れると、一瞬といえども、そこにスキが生じ、ディフェンスのはたんを招く。たとえそこがうまったとしても、次に穴があき、相手方の連続した攻撃を防ぐことは困難になる。

ボールを頂点とし、常に同じ様な形でディフェンスが左右に動くことが一番望ましい形である。

チームは、充分にフォーメーションの形を知り、常に流動的にボールの位置によって、守備陣形を変化させていくことが守備にはたんを生じさせないことになる。

それとともに相手の攻撃に対しもっともふさわしい守備ができるようにいくつかの守備フォーメーションをもっていることがチームにとっていかに有利であるかは多言をまつまい。

最後に、どのようなフォーメーションを使うにしろ、その基礎には個人のすぐれた防御技術がなければならない。これなしには、どのような、フォーメーションをしいてもどうにもならず、一番弱いところが破られることになってしまう。

それとともにキーパーと呼吸を合わせていることも忘れてはならないことである。

必らず、ゴールの一方の角はディフェンスが責任をもつということをキーパーに信頼させるようなディフェンスをしなければならない。

シュートを全く打たせないというのが理想であろうが、打たせても必らずキーパーが方向を掴めるようにしておかなければならない

それを必らずしないことには、キーパーはどちらにシュートがくるか判断ができず、思いきったプレーをすることができなくなってしまう。

攻撃

ハンドボールの攻撃はきわめて流動的である。決りきったフォーメーションを金科玉条にしていたのでは、攻撃は全く成功しない。

場合に応じ、状況に応じ、ボールをもった者がその場のとっさの判断でボールを動かし、どんどん新しい形を作りあげていくことが望ましい。

バリエーション、これがハンドボールのフォーメーションの一番重要なことである。ある所までは一般的な原則はあるが、それ以後はプレーヤーのとっさの判断、特にボールをもっている者の、で状況を切り開いていくのが通例である。たとえばロングシュートをうつべくジャンプして、シュートする。同じ形からポストに球をおとし、ポストシュートをする。同じ形からサイドにパスし、サイドシュートする。自らはブロックに入り、バックパスをし、次に入ってくるものにシュートさせるというように一つの場合をとってみてもいくつにも変化できる。自己の技術、相手のキーパー、ディフェンスの位置、これらを総合的にとっさに判断し、もっとも得点になる可能性の強いものを選び、適格な判断をし、それに適したパスあるいはシュートをする。

このようにある場面では、7人制ハンドボールでは、5つのパス（味方のフィールドプレーヤー5人）とシュートという六つの選択をすることができる。それにそれぞれのタイミングを考えると無限の可能性がでてくる。それぞれの場面で無限の可能性があり、しかも連続した状況で無限の可能性が連続している。これを生かすも殺すもボール所有者の判断にかかっている。

それにそれぞれのチームはプレーヤーの個性に合せたフォーメーションを作り、プレーイーヤの個性が十分に発揮できるように、フォーメーションを構成していくべきである。要は攻撃にしろ、守備にしろ十分にチーム独自の方向をうちだすように配慮すべきであろう

ハンドボールの歩み（第12回）

第三回大会は FA-ギョッピンゲン（西ドイツ）が優勝

ヨーロッパカップ編 ②

第三回大会はFAギョッピンゲンが制し二連覇の礎を築く

第三回大会は1959年から1960年にかけて行なわれた。

参加チームも13チームから15チームに増え、大会はますますにぎやかになり、ようやく、この大会もヨーロッパ球界に根をおろし、基礎固めができあがった形をとるようになった。

この大会の組み合せを見ると、近い地域同志があたる形になり、強さでシードされたものでないため、強いチームがごく早い時期に星をつぶし合うという状況になってしまった。

第二回大会にもこの傾向が見られ、東欧圏が強力チームに成長していたので、より残念であった。

FA・ギョッピンゲンは西欧圏を舞台に試合を進めて、快調に進んだ。

15チームのうち、一回戦をシードで試合せずに進んだのは、スウェーデンのRIK・ゲーテボルグだけであり、他の14チームはすべて一回戦で当ることになった。

一回戦

GF・アールフス（デンマーク）	24―11	フレデンスボルグSB・オスロー（ノルウェー）
デュクラ・プラーグ（チェコスロバキア）	31―19	ボラク・バンジャ・ルカ（ユーゴスラビア）

大差がついたが強力チーム同士の対戦がまず行なわれ、デュクラが大勝した。

TV・アールスメール（オランダ）	17―13	BTV・St・ガレン（スイス）
FC・ポルト（ポルトガル）	21―11	OC・フレマール・ブラッセル（ベルギー）
UC・パリ（フランス）	15―12	SC・エシュアルゼット（ルクセンブルグ）
ディナモ・ブカレスト（ルーマニア）	13―13（引分） 14―11（再試合）	スパルタ・カトヴィッツ（ポーランド）
FA・ギョッピンゲン（西ドイツ）	棄権	SU・ヘルシンキ（フィンランド）

前回の二位のギョッピンゲンは相手の棄権という好運にめぐまれ準々決勝に進んだ。またディナモ・ブカレストが新顔のスパルタ・カトヴィッツに苦戦し、引分再試合の後でやっと準々決勝に進むことになった。

スイスのSt・ガレンは連続出場したが、今度は一回戦で敗れさった。連続出場を果しているのはFA・ギョッピンゲン、グラノラース・バルセロナ、FC・ポルト、BTV・St・ガレン、SC・エシュアルゼット、OCI・レマール・ブラッセル、SU・ヘルシンキ、デュクラ・プラーグ、RIK・ゲーテボルグの9チームであり入れ替ったのはオリンピア・ヘンゲロがTV・アールスメールに、パルチザン・ブジェロバールがボラク・バンジャ・ルカに・IF・ヘルジンガーがアールフス・GFに、アスポム・ボルドーがUS・パリに代り、新顔として、ポーランドのスパルタ・カトヴィッツとノルウェーのフレデンスボルグ・SB・オスローの2チームが出場した。

13チームのうち9チームが同じというのは対国際の試合における強弱は別として、同一国内にあっては、ヨーロッパ杯にでるチームはきわめて安定した力をもっていることを示していよう。他のチームに替られることなく、同一チームが国内で二連覇をとげなければヨーロッパ杯連続出場はできないのであるから、たとえ一回戦で破れさったとは云え、並々ならぬ力をもった強力チームということが云えよう。

▽準々決勝

FA・ギョッピンゲン	27―12	TV・アールスメール
アールフスGF	17―16	RIK・ゲーテボルグ（スウェーデン）

前回の勝者RIK・ゲーテボルグが準々決勝で接戦の末、アール

フス・GFに破れ去った。FA・ギョッピンゲンは比較的楽な相手アールスメルを大差で破った。

UC・パリ　18―13　FC・ポルト
ディナモ・ブカレスト　23―22　デュクラ・プラーグ

UC・パリ―FC・ポルトは準々決勝のうちでは、もっとも実力的に劣るとみられたもので、UC・パリがやや強いところを見せたデュクラ・プラーグは前年と同様準々決勝でディナモ・ブカレストにあたり、またも1点差で敗れた。

こうなってくると、チェコ―ルーマニアの試合というのははなはだ因縁めいてくる。

世界選手権でも、第四回選手権の決勝戦の第二延長にもつれこんだ試合での9―8でルーマニアの勝、第5回大会の事実上の決勝戦といわれた準決勝における戦いはやはり16―15の1点差でルーマニアの勝。第6回世界選手権、これまた事実上の決勝戦といわれた準決勝での両国の対戦は2点差でチェコ。このように両国は1点差でしのぎを削っている。

両国のトップチームであるディナモ・ブカレスト、デュクラ・プラーグの対戦も両者ゆずらぬ戦いを60年代初頭からくりかえしている。このような両国の関係は好敵手としてお互いに認め合っていることになろう。

▽準決勝

FA・ギョッピンゲン　10―8　ディナモ・ブカレスト
アールフス・GF　20―10　UC・パリ

デュクラ・プラーグを接戦の末破ったディナモ・ブカレストも、どうもケンパ氏に率いられたFA・ギョッピンゲンにはどうも相性が悪いらしく、前年と同様に準決勝で破れさった。

前年よりは点差はつまったとは云え、2点差になっているということは、翌年世界選手権を獲得する国のトップチームとしてはいささか情ない状況であった。このような状態であったので1961年の世界選手権でルーマニアが優勝候補に挙げられていなかったのも当然であろう。

アールフス・GFはくじ運にめぐまれ、準決勝の相手としては、もっとも楽な相手に当ることになった。

UC・パリを大差で破ったのは当然であろう。フランスのチームが準決勝まで進んだのはこれがただ一度であった。その後くじ運にはめぐまれることがなかったため、準々決勝以上には進めなかったことと思われる。

決勝はFA・ギョッピンゲンとアールフス・GFの西欧圏同士で争われることになった。

準決勝に西欧圏のチーム3チームが残ったのは、これが最後で、西欧圏同士で決勝が争われたのは二回大会に続いてこの第三回大会が最後である。50年代と60年代の接点にあたるこの第三回ヨーロッパカップはハンドボール界にとっても大きな転機になった時期にあたる。

▽決勝1960年3月12日パリ

FA・ギョッピンゲン　18―13　アールフス・GF

結局、準決勝でディナモ・ブカレストに苦しんだが、これを破ったFA・ギョッピンゲンがくじ運にめぐまれ、決勝に進出したアールフス・GFを破り、初の栄冠を獲得した。

60～61年は第4回世界選手権開催の年にあたっているため、ヨーロッパ杯の男子は開催されていない。次の1961～62年にかけての大会では、FA・ギョッピンゲンが連覇し、男子では、現在までどのチームもなしとげていない快挙をなしとげた（女子では、67、68年にシャルジリス・カウナス（ソ連）が二連覇の快挙をなしとげ、今年は中止であるが、来年以後の大会でこの記録をのばす可能性をもっている）。

60年というのは、ハンドボール界にとって、大きな転機であったのはこれまでにも述べたことがある。

ヨーロッパ杯については、二回三回は西欧圏が主力を占めている感があるが、このあとになるとほぼ対等の力になり、その後は東欧圏に中心が移っていく傾向は否めない。

世界選手権にしても1958年の第三回大会までは西欧圏が占めているが、その後は東欧圏、特にルーマニア、チェコに主力は移っている。第5回、第6回世界選手権でスウェーデン、デンマークがそれぞれ二位を占めているが、実力的に見れば、二度とも事実上の決勝戦は準々決勝のルーマニア―チェコ戦であったのだから、一、二位は四回大会以後、ルーマニアとチェコが占めていると考えるのが常道であろう。

ヨーロッパカップにおいても、この両国のトップチームは常に上位を争っている。

次回は女子の第1回大会が始まる60～61年の状況を中心に見ていくつもりである。

ヨーロッパカップもこのあと参加チームが漸増し、益々盛況になっていく。

各地で熱戦がくりひろげられ、東欧を中心として、種々のエピソードをおりまぜながらヨーロッパカップは行なわれている。この後には、ヨーロッパ以外からの参加と多くの活躍がある。（藤本　強）

関大、前半のリード活かし優勝

西日本学生 同志社大の反撃実らず

シーズン開幕を飾る第9回西日本学生選手権（トーナメント）は4月6日から10日までの5日間、大阪府立体育会館で開かれた。

今年は、地方学連からの参加校がなく関西学連20校が出場、決勝は関西大—同志社大の宿敵同士の間で争われ、関西大が前半のリードを活かして2年ぶり2度目の優勝を飾った。

▽1回戦（4試合）

桃山学院 20—13 大阪薬大
大阪外語大 23—12 大阪歯大
大阪大 19—15 大阪府大
京都産業大 11—6 近畿大

▽2回戦

同志社大 35（19—5、16—4）9 追手門学院大
甲南大 15（8—6、7—5）11 京都大
大阪経大 23（13—3、10—1）4 大阪市大
桃山学院 26（15—1、11—4）5 関西外語大
大阪外語 18（8—5、10—10）15 和歌山大
関西大 39（23—2、16—0）2 大阪大
京都教大 17（10—2、7—3）5 京都産業大
大阪体大 27（15—4、12—5）9 大阪工大

▽準々決勝

同志社大 15（10—6、5—6）12 桃山学院
甲南大 24（13—8、11—5）13 大阪外語大
関西大 23（13—7、10—4）11 大阪経大
大阪体大 26（15—8、11—7）15 京都教大

▽準決勝

同志社大 15（5—9、10—2）11 甲南大
関西大 26（13—8、13—6）14 大阪体大

甲南大、大体大破り3位に

▽3位決定戦

甲南大 17（9—6、8—6）12 大阪体大

▽決勝戦

関西大 17（6—8、11—6）14 同志社大

【同大】	得		得	【関大】
二橋	0	GK	0	和田
町田	1	FP	3	馬着
舟木	5		0	中辻
光田	2		4	許
大羽	1		5	松田
阪野	3		3	西脇
中野	0		0	伊藤
富田	0	（審・高倉 丸岡）	0	竹内
増岡	0		0	小島
松井	0		2	宮松
岩田	0		0	安原
	14 (1)	7 MT	(1) 17	

○……各試合とも順当な結果で終わり、ほとんど波乱はなかった。

出場校の内訳をみると1部5校、2部4、3部6、4部4それに新加盟1（関西外語大）となり、このうち上位のランク校が敗れたのは3位決定戦（甲南大—大体大）だけである。

○……決勝戦は関西大が立ちあがりから馬着、許、松田らを中心とした速い動きで主導権を握った。

リードされた同志社大は後半舟木、光田らのシュート力を活かして、積極的な攻撃をみせ、20分には11—14まで追いあげた。

関西大はこのあたり前半のようなまとまりのあるプレーがみられず、同志社大は追撃の機会をさらにつかんだのだが、かえって焦りをよんでパスミスから逸機、相手に逃げ切りを許した。

○……関西大のコンビネーションプレーに成長のあとがうかがえる一戦だった。同志社大はエース中井を全日本に送ったため舟木一人しか頼れぬ弱味がひびいた。（K）

本誌創刊10周年を迎かう

▽本誌も今月号で創刊10周年となった。

ここまで来られたのは読者各位の御支援がすべてである。改めてお礼を申しあげるものです

歴代編集スタッフは、たえず機関誌というものの性格について悩み、同時に検討をくり返して来た。

広報（公報）伝達的なものなかりであっては読むかたも、作る方もおもしろくない。

かといって商業誌のように興味本位の記事ばかりで埋めつくすのも本旨ではないだろう。

でき得るならその両者を盛り合せた内容の雑誌にしたい—そう考えながら過去63冊、編集スタッフが自讃できるものがないことを悔やんでいる。

▽ところで、これからの本誌はどう進むべきか。読者各位のきたんのない御意見を拝聴したいと思うが、われわれは日本協会と地方協会、さらには個々のチーム、プレイヤーとのパイプ役が使命であり任務だと考えている。

また、機関誌とはいえ、斯界では唯一といってよい定期性のある言論機関だ。批判精神を持ちつづけて行きたい。

本誌が日本協会の施政に先行したり、批判をしたりするのはおかしいという意見があるそうだ。こういう人間に対してわれわれは反発を感じるし同時に将来の斯界を憂れう。

▽本誌が討論の場となり、球界前進のささやかな力となることをわれわれは一つの理想として掲げたい。

多くの読者から、建設的な意見が寄せられることを切望するゆえんである。

地方の小さなニュース、動きもどしどし教えていただきたい。

50号（43年2月）の時も書いたが、本誌は編集委員が作るのではなく皆さんがこしらえるのだ。編集委員は本来、原稿整理役にすぎない。

▽10周年を飾っていただくにふさわしいことがあった。本誌前号で大阪の東嘉伸氏が投稿された「世界選手権基金の制定を」が田村会長以下の〝合議スタッフ〟を動かし近々実現の手ハズが整えられる。本誌10年史のなかで、これに優る朗報はない。

これからも読者各位から日本協会をリードするような卓越した意見が寄せられることを大いに期待したい。

（編集部）

各地の記録

大同製鋼、富士鉄を破る

▼第1回県実連会長杯愛知実業団選手権（4月・名古屋金山体育館）

▽リーグ戦

富士製鉄 42―7 三菱重工
トヨタ車体 22―20 日本碍子
大同製鋼 41―6 タヨシ産業
大同製鋼 35―10 ブラザー工業
トヨタ車体 28―5 三菱重工
富士製鉄 32―10 日本碍子
日本碍子 29―16 三菱重工
大同製鋼 33―11 トヨタ車体
タヨシ産業 19―17 ブラザー工業
日本碍子 31―22 ブラザー工業
富士製鉄 15―10 トヨタ車体
タヨシ産業 32―19 三菱重工
ブラザー工業 19―18 三菱重工
日本碍子 25―13 タヨシ産業
大同製鋼 19―13 富士製鉄
大同製鋼 18―11 三菱重工
トヨタ車体 16―14 タヨシ産業
富士製鉄 31―8 ブラザー工業
大同製鋼 33―14 日本碍子
トヨタ車体 23―7 ブラザー工業
富士製鉄 26―10 タヨシ産業

【順位】①大同製鋼6戦全勝②富士製鉄名古屋5勝1敗③トヨタ車体4勝2敗④日本碍子⑤タヨシ産業⑥ブラザー工業⑦三菱重工

一女商、山陽女を降す

▼第11回広島県知事杯争奪トーナメント（4月・尾道高）

▽高校男子準々決勝

三原工 12―9 呉宮原
尾道 25―7 修道
広 16―13 呉三津田
呉工 19―11 呉港

▽同準決勝

三原工 7―5 尾道
呉工 12―10 広

▽同決勝

三原工 18（7―3、11―5）8 呉工

▽同女子準々決勝

山陽女 15―0 進徳女
豊栄 13―1 賀茂
広島一女商 26―0 白木
呉宮原 8―5 呉商

▽同準決勝

山陽女 14―0 豊栄
広島一女商 9―1 呉宮原

▽同決勝

広島一女商 3（1―1、2―0）1 山陽女

▽一般男子1回戦（3試合）

日本鋼管福山 25―10 呉造船
全広商大 20―12 松本商OB
日新製鋼呉 17―15 広島大

▽同準決勝

三菱レ大竹 24―10 日本鋼管福山
日新製鋼呉 18―12 全広商大

▽同決勝

三菱レイヨン大竹 29（14―7、8―15、4―0、3―3）25 日新製鋼呉

男子で首里高勝つ

▼第2回全沖縄選抜（総合）選手権（1月・那覇）

▽男子準々決勝

興南高 18―11 那覇商
首里高 20―12 沖縄工
那覇教員 18―10 南銀
琉球大 失格 那覇高OB

同準決勝

首里高 16―13 興南高
那覇教員 16―13 琉球大

▽同決勝

首里高 14（9―4、5―6）10 那覇教員

首里高は初優勝

▽女子1回戦（＝2試合）

琉球大 10―6 真和志高
小禄ク 9―7 浦添高

▽同準決勝

興南高 12―4 琉球大
小禄高 20―9 小禄ク

▽同決勝

小禄高 22（11―2、11―6）8 興南高

小禄高は2連勝

県工クが初優勝

▼第5回石川県総合室内選手権（2月・石川県体育館）

▽男子準決勝

県工ク 11―8 金沢高専
工大附高 16―10 金商ク

▽同決勝

県工ク 12―10 工大附高

県工クは初優勝

▽女子決勝

小松市女高 29―10 明徳高

小松市女高は5連勝

広島協会の事務局

広島協会事務局はこのほど左記に変わった。

広島県呉市広町安永新開　県立呉商業高校気付（事務局長・丸口哲美氏＝広島協会副理事長）

三重協会住所変わる

三重協会の事務連絡先が次のように変わった。

三重県津市むつみヶ丘　津女子高校内（理事長・中根武彦氏）

鳥取協会も変更

鳥取協会事務局はこのほど次の住所に変わった。

鳥取県米子市長砂町一八八、県立米子南高校（高木敏行氏）

電話 08592（3）一六四一

大阪協会が改組

大阪協会は事業の円滑化をはかるため、今年度から理事長の下に総務局（庶務、渉外、登録、財務）と競技局（競技、審判、指導普及、記録報道）を新設した。主要役員は次のとおり、

▽会長、野原博彦▽副会長藤田信明、山田計▽理事長神田清▽総務局長、山田稔▽競技局長、岡本克彰

関東学連に2校加盟

関東学連ではこのほど一橋大（東京）と流通経済大（茨城）の新加盟と学生新委員を次のように発表した。2校の参加で全加盟校数は男子33、女子6となった。

▽委員長　奥川正春（早大）▽副委員長　栗沢侃（芝工大）、大城春夫（国士館大）▽会計野原文子（日体大）

都協会長に数原氏

東京都協会ではこのほど会長に数原洋二氏（三菱鉛筆社長、全日本実連副会長）を新任、渡辺前会長は顧問となった。このほかの役員は次のとおり。

▽理事長　佐野和夫▽常任理事　島田正士、池田鉄哉、田中秀夫、近藤金博、古賀健一郎、猪狩武春、岡前義春、松田利秋、竹野奉昭

編集後記

五月晴れの空の下、全日本選手団がヨーロッパ遠征に出発していきます。大きな期待をかけられての遠征だけに、役員選手諸氏も責任を感じるとともに希望に胸ふくらむものと思います。多くの御土産を斯界にもたらしてほしいものです。

国内では各地に試合が展開され、いよいよ1969年度の本格的な幕あけを迎えています。大きく、強くハンドボール界が発展してほしいものです。（T・S・F）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第六十四号
昭和四十年六月　日第三種郵便物認可
昭和四十四年四月二十五日印刷
昭和四十四年五月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町一二五
電話 大代表(467)三一二一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円
（年間購読11回・千二百円）